
境界向こうのモノ騙り

田山歴史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界向こうのモノ騙り

【Nコード】

N2552E

【作者名】

田山歴史

【あらすじ】

この連載のルール：短編集。一話読み切り終了形。コメディからシリアスまで色々ごっちゃ。続くようで続かない。前回の物語から次回の物語に一人だけスパリアウト。全物語は同軸の世界観で構成しております。人物間の関連とか考え出したらきりがないのであくセント程度で。一話読み切り完了形なので気軽に楽しんでください（大事なコトなので二度言いました）。

1 騙り：それゆけ二トちゃん！（前書き）

自分が連載してる他の小説を楽しみにしてる方にはすみません。たまには全然別のものを書かないと心が折れることに最近気づきました（笑）

タイトルからお察しの通り、1話はコメディ風味です。文章表現等には気を使ってるつもりですが、読んでて嫌悪感を催した方はブラウザの『戻る』ボタンをプッシュすることを推奨します。

1 騙り：それゆけニートちゃん！

分からないまま終わるがいい。

ニート。英国政府が労働政策上の人口の分類として定義した言葉で「Not in Education, Employment or Training」の略語であり、日本語訳は「教育を受けず、労働をおこなわず、職業訓練もしていない人」となる。

日本での定義は「年齢15〜34歳、卒業者、未婚であつて家事・通学をしていない者。あるいは学籍はあるが、実際は学校に行っていない人、既婚者で家事をしていない人」のことを指す。

基本的に内向的で他者とコミュニケーションが取れない人間が多い。

ただ、働いていない人の中には自律神経失調症などで脳内物質のバランスが取れなくなり、働くことが困難になってしまう本当に深刻なケースもあるので軽い気持ちで一括りにしてはいけない。

できない人間とやれるけどやらない人間は全然違うのである。

類似語としてはネトゲ廃人がある。

クソ疲れてだるい。さつさと家に帰って肉食って寝よう。

特に病気というわけではないけれど、この俺こと黒崎健吾の体調はそんな感じだった。今年の4月。俺が高校二年生に進学した直後、両親が仕事の関係で海外赴任することが決定した。

もちろん、言うまでもなく俺は日本に残ることを強硬に主張した。日本には友達もいるしそもそも海外になぞ行きたくはない。米が食えなきゃ黒崎健吾は間違いないくストレスで死んでしまうことを訴え、結局独り暮らしをすることになった。

ただ、あまりに強硬に主張したために仕送りはスズメの涙程度しかなく、毎月の生活費はバイトで稼いだ金が全てと言っても過言じゃない。幸いなことに、住居に関しては家賃が格安の物件を紹介してもらったので、生活費に関してはさほど困ってはいない。勉強とバイトの両立がちょっと辛いだけだ。

「ま、その辺はなんとかしなきゃいかんなあ」

近所の精肉店で購入した安い豚肉の入ったビニール袋を手に、愛車である原付、『黒亭号』から降りて、俺はボロアパートの107号室。現在の黒崎健吾の自宅へと向かう。

今日は楽しい給料日。キムチ鍋くらい作っても罰は当たらないんだ。

独りきりで鍋つてのもなかなか悲しい話だが、現在の時刻は22時。月の綺麗な深夜だ。アパートに仲のいい人間はいるが、さすがにこんな時間に呼び出すのも忍びない。

そういうわけで、今日は独りで鍋パーティ。とても悲しいがこれって独り暮らしなのよね、と自分を納得させながら、俺は自宅の扉を開ける。

「うむ、よく帰った」

部屋の中にいたのは、斜め45度くらいから見れば美少女と違って間違えてしまつかもしれない少女。猫耳と尻尾と通称ゴスロリと呼ばれる衣装がこの上なく似合っていたが明らかに犯罪臭い匂いがぷんぷんする。

そんな女が、王様も驚愕するほどのえらそうな態度でこちらを見据えていた。

扉を閉めた。

「……………」

ドアの番号を確認すると、間違いなく107号室。間違いなく、俺の家である。

「……え？」

深夜の22時に家に中学生。しかもゴスロリ。言い訳無用っていうかなんていうか。

拉致。監禁。逮捕。留置所。裁判。裁決。執行猶予。受刑。

ば、馬鹿な！ 身に覚えがまるで無いのに俺の将来にとんでもない暗雲が！？

待て。落ち着け。こういう時は当然のごとく常識的に素数を数えるんだ。素数は自分と1でしか割り切れない数字。俺に勇気を与えてくれる。

0.3秒で思考完了。俺はきびすを返した。

「よし、今日は疲れたからちよっと奮発して、安いビジネスホテルでも借りちゃおっかな！ 気分転換って大事だよな！」

「それは問題解決どころか現実逃避の一種だ。それに肉体的及び精神的に確かに疲れているようには見えるが、ダメーじがあるほどではないだろう。むしろ欲求不満が溜まっているようにも見える」

「……」

ゆっくりと振り返ると、猫耳フードの少女は扉から顔だけを出してにやにやといやらしそうに笑っていた。

「ああ、それとそこから一步でも動いたら『いやあ』で始まるでっかい声を出す。留置所に一泊するのが嫌なら、こっちに戻って来るのが吉だと提案するがどうだろう？」

「それは提案じゃねえ。脅迫と言う」

「しかし社会はそうは見えてくれぬ。高校生の部屋に泣き叫ぶ見知らぬ中学生。事情を知らない大人たちはなんて思うだろうか？」

言われるまでもない。もしも俺がそういう現場に居合わせたら、大人たちと同じコトを思った上で犯人をボコボコにするだろう。問題なのは、そのボコボコにされる犯人が俺ということになりかねないことだが。

仕方なく、俺は溜息混じりに口を開く。

「……黒崎健吾だ」

「む？」

「親から習わなかったか？ 初めて会う相手には名前を名乗る。俺の名前は黒崎健吾。お前は？」

「ふ、よくぞ聞いた」

少女はまるで少女らしくない『ニヤリ』とした笑顔を浮かべて己の名を名乗った。

「私の名前は二トリもん。未来からやって来たヒト科ヒト目の女型ロボットよっ！」

「……………」

「どうしよう。……本当に、どうしよう？」

頼んでもいないのに、自称ロボットが我が家にやって来た。

「おい、小娘」

「む？ 人の名前を聞いておいて小娘はなかるうよ」

「じゃあ、二ートでいいな」

「ふむ、二ートか。英語訳すると『Need（必要）』にも似た言葉だな。なかなかいいではないか」

「そうか……納得してもらってなによりだ」

俺はそう言いながらにっこりと笑って扉を閉めた。

「ふくおっ！？」

もちろん、そんなことをすれば扉から顔だけを出している少女の顔がどんなことになるかは言うまでもない。

扉に顔を挟まれた少女はドアから抜け出そうとジダバタともがいた。

「き、貴様、図つたなっ！？」

「図つたもへつたくれも不審人物がドアから顔半分出してりや普通はこうするだろ。さて、ところで話は変わるが趣味はなんだ？ 好きな食べ物？ 学校はどこだ？ クラスは何組だ？ 出席番号は？ 部活はどこに所属している？ 家の住所は？ 電話番号は？ 親の名前は？ 携帯電話は持ってるか？ 現金の持ち合わせは？ お祈りの準備は？ トイレは済ませたか？ 部屋の隅でガタガタ震

ところで、健吾。この部屋はなんとというかその……いい部屋だな。インターネットができる環境も構築してあるし、ゲームも見た限りでは買ったはいいがやらずに放置してある最新作が積まれているし、本棚にある漫画も私のツボをきっちり押さえてある。このぶんならしばらく退屈することはないだろう。

実に素晴らしい。きっと私は大満足で日々の生活を送ることができるだろう。

うむ。ではそろそろ夕飯にしようではないか。

四畳一間のDKという狭い空間、それが俺の部屋の全てだ。

だが、今日はなぜかその部屋には俺の他にもう一人、よく分からない存在が当たり前のように居座っている。

クパクパといい音を立てて沸騰する鍋を見つめながら、俺は青筋を浮かべていた。

「……で、その説明で納得できる人間がどこの世界にいるのか教えてもらおうか？」

「そう言われても事実なのだ。納得しろ」

「納得しろと言われて納得できる人間がいたらそいつはただの馬鹿野郎だ！ しかもお前なんでここに住む気満々なんだよっ！？ 意味が分からないぞっ！」

「機密事項だ。あと、説明がめんどいし、私が楽だからだな」

「その言い方だとどう良心的に解釈しても後半部分が目立つじゃねーかっ！ 素直に機密事項で止めておけよっ！！」

「私のモットーは『自分に正直に生きる』だ。機密とかそういう面倒なのは、まあ二の次三の次くらいで」

「ぐぎゃああああああああああああああああああああああっ！」

思い切り叫んで、怒りのあまり頭を掻き毟った。

話どころか日本語が通じない人間がいることは知っていたし、バ

イト先にもそういう嫌な人間は多かれ少なかれいる。そういう理不尽に衝突する度に青筋立てながらもなんとか誤魔化し誤魔化しやってきたつもりだったが、ここまで無茶苦茶なのは初めてだった。

（女の形をしたものをぐーで殴りたいと思ったのは生まれて初めてだっ！）

歯軋りをしながら拳を握り締めるが、それでもなんとかぎりぎりのところで堪えた。

ゆっくりと息を吐いて気分を落ち着けて、仕方なく説得を試みる。

「……なあ、小娘。戯言はいいからさっさと帰れ。どうやって俺の部屋の鍵を開けたのかは知らんが、今すぐ親元に帰るなら住居不法侵入は見逃してやってもいいから」

「はっはっは、健吾は冗談が上手いな。お、鍋がそろそろいい具合になってきたぞ」

「……あっはっは、殺してえ」

あまりの傍若無人に少しばかり泣きそうになりながら、それでも空腹には勝てずに俺は鍋に箸を伸ばす。

と、そこでふと気になったので聞いてみた。

「なあ、ロボットって腹減るのか？」

「私は型は古いが高性能だからな。未来の最新式のロボットが空気と水で稼動する中で唯一人間と同様の食物をエネルギーに還元するように作られている。元々は介護用ロボットとして作られた面もあるのでそういう機能が備わっているんだ。……まあ、私は介護とか死んでも御免だがな」

「……………」

介護用ロボットが介護が死んでも御免とか言っちゃう時点で、なんだかもう未来が終わっているような気がした。

もちろん、少女の言葉をそのまま信じたわけではない。さっき腕や頭を外したのだって、マジックに使われる種の一つかもしれない。そんなマジックなど見たこともないが、世界のどこかにはあるかもしれない。

それに、いつだって強い言葉を平気な顔で吐く人間の方が強かったりするのだ。

「で、お前が言ってる……その、『禁則事項』ってのは、つまり俺に関係あつたりすることなのか？」

「関係もクソもバリバリに当事者なんだがな」

「どういうこつた？」

「未来から誰かが助けに来るというシチュエーションはありふれて使い古されたものではあるが、その全てに共通しているのは、当事者がそれに関わる人物がのっぴきならない事態に陥っているということだ」

いい音を立てて煮え立つ鍋から豆腐をすくいながら、少女は目を細めた。

「そう……たとえばキミが世界を滅ぼすとか、そんな感じだ」

口調はひどく真剣だったが、豆腐をふーふーしている姿は緊張感に欠けていた。

俺は少しだけ溜息を吐いて少女を見つめた。

「あのなあ……俺にそれを信じるってのか？」

「いや、信じてもらおうなどとは思っていないし、ここに至ってはそんなコトを考える方が馬鹿らしい。私は過去に来て、どこかの誰かの都合のいい未来を捏造するだけの存在だ。キミの事情も、誰かの事情も、そういうものは知ったことではない。私はただ任務を果たすだけ。その後は別にどうでもいい」

「……………」

なんとというか……外見のわりにはひどく冷めた言葉だった。

俺は少しだけ押し黙る。とりあえず現実逃避気味に否定してはみたが、腕や頭が外れるなんてマジックは見たことがない。あつたとしても大抵大掛かりな仕掛けが必要で、今ここで頭を外してみると言われて外せるようなマジシャンは……まずいないだろう。

そういう意味では、部分的にはあるが目の前の女を少しばかり信じてやってもいいのかもしれない。もちろん、俺が世界を滅ぼすなんてのは信じられないが。

信じたくも……ないが。

はふはふと豆腐を食べてご飯をお代わりし、少女は再び口を開いた。

「まあ……別にキミが世界を滅ぼしたりはしないんだが」

「しねえのかよっ!? 一瞬自分の可能性にちよつとびびっちゃったりしちやつたじゃねえかっ!!」

「たとえばつて言つたじゃないか。私のせいにされても、勝手に勘違いしたのはそっちだろう?」

「詐欺師はみんなそう言うんだよこの野郎っ!!」

もちろん、そこまで狡猾な詐欺師に出会つた事などないが、俺はいい加減に我慢の限界に達して思い切り叫んだ。

「いいから出て行け馬鹿女っ! これ以上厄介ごとに付き合わされるのは御免だ! 俺は平穩で平和な生活がしたいんだよっ!」

「彼女もいないわびしいバイト生活のくせに、平穩で平和とは片腹痛い」

「よーし、分かつた。フルパワーだっ!!」

「ふっ、機心双皇拳伝承者である私に拳で挑もうなどは笑止! ついでにこの鍋は私のものにしてやるZE!」

「ぬかせ! それは……俺の肉だああああああああああああああああああ!!」

雄叫びを上げながら、俺は拳を握り締めた。

己の意地と存亡と夕飯を賭けた、それは人が人たるための戦いであった。

……かもしれぬ。

結局、鍋を二人で分け合つて、ついでに寢床（押入れ）まで提供

してしまった俺は、なんとというかお人好し以前に阿呆としか言いようがなかった。

明日には追い出そうと決意しながらも、その決意はきつと空回りするんだろうなあと半ば確信しながら、俺は溜息をつきながら眠りについた。

そして、翌朝。目覚まし時計の音と共に、俺はゆっくりと目を開けた。

時間は午後6時。……っておいコラ。

「……なんで午前の6時にセットしたはずの時計が午後6時に鳴るんだ？」

「ああ、うるさかったので止めた。お前も起きる気配がなかったの
で、そのまま捨て置いたがなにか問題でもあったか？」

「……………」

なんで傍若無人な小娘だろう。俺の堪忍袋はそろそろ限界だぞ？
ともあれ、既に学校は終了している。今日はバイトも休み。ゴミ
はさほど溜まってはいないし、洗濯も昨日のうちに大半を終わらせて
ている。やることもなさそうだったので、今日は安息日にするこ
とにした。

問題なのは、あと8時間程度で今日が終わってしまうということ
だが。

「……なんか、一日無駄にした気分だな」

「そうでもなからうよ。昨日見た限りではかなり疲れているようだ
つたからな。バイトやら勉強やらで忙しいのは分かるが、私のよう
にちゃんと休まないと過労で死ぬぞ」

「……いや、休むもくそもお前働いてねーだろ」

「ふっ、なにを言う。私の任務は健吾の側において《禁則事項だにや
ん》をするだけでいいのだ。従って、私は今めっちゃ仕事してる」
「……………」

リモコンを振り回して遊ぶタイプのゲームに熱中してこちらを振り
向きもしない小娘には色々突っ込みたいところはあったが、既

にそれは昨日やり尽くしたので、とりあえずなにも言わずに枕に顔を埋める。

(……眠いな。腹も減ってるけど、とにかく眠い)

最近バイトが忙しくあまり寝ていない上に、そろそろテストが近いので勉強の方にも力を入れなきゃいけない。

……面倒だけど、やることやらねーと後で色々としんどくなる。

しんどいのは嫌だ。今がきつくて、後で苦勞するよりは今苦勞した方が何倍もまし。今できることを今やって、後でさらにやるこ
とが増えたとしても、やるべきことをさぼるよりはいいはずだ。

それは……別に間違っちゃいないだろうと、思う。

(……まあ、でも今日くらいは別にいいか)

意識が闇に落ちていく。ゲームに興じる小娘が気にならない程度に、俺は疲れていたのかもしれない。

今預金通帳とか盗まれたら最悪だなあとか思いながら、俺は枕に顔を埋める。

さほど時間もかからずに眠りに落ちる自信はあったが……その眠気は、図らずも鳴り響いたインターフォンによって遮られた。

「ちっ……ゲームの最中にやって来るとは不躰な客め」

「って、なんでお前が対応しようとしてんのっ!？」

「居候の身で客をスルーするわけにもいくまい。まあ、対応程度だったら任せておけ。どんな客だろうと次の瞬間には血反吐を吐いて地面に倒れていることだろうよ」

「明らかに殺してんじゃねえか! いいからお前は大人しくゲームしてる!」

眠気を振り払って起き上がる。髪の毛を整えたいところだったが客を待たせるわけにもいかず、仕方なく水で顔を適当に洗ってから対応することにした。

ドアを開けると、そこには見知った教師が立っていた。

「こんにちわ……じゃないか。こんばんは、黒崎。無断欠席とはい度胸だな」

「……………」

ウチのクラスの担任の教師だった。

工藤所縁^{くどうゆかり}。二年D組の担当教師。担当教科が美術のせいか、スーツの上に白衣を身につけている。縁の厚い黒縁眼鏡に細い顔立ち。顔はまあ美人と取れないこともないが、いつも機嫌が悪そうな上に授業中でも平気で煙草を吸い、おまけに普通に生徒をぐーでぶん殴るので、ついたあだ名が『狂犬』という教師にあるまじき女。

なんで辞めさせられないのかは学校の七不思議の一つと化しているが、俺としてはものすごく好みの女性なので、別にそれはどうでもいいのだった。

「あー……………すみません、ゆかりん。さつき起きたばかりなんすよ」
「ああ、大体そんなこったろうと思ってたよ。バイト漬けの生活も悪くはないが、一日中眠りっぱなしになるくらい疲労するなら、やめた方が無難だぞ。……………あと、ゆかりんはいい加減にやめろ」

不良教師に似合わぬ正論を言いながら、ゆかりんは溜息混じりに鞆の中からプリントとノートを取り出して、俺に手渡した。

「……………これは？」

「見ての通り、今日の分のノートとプリントの写しだ」

「ゆ、ゆかりん？ 熱でもあんのか？」

「ばか者。一介の担任教師が生徒ごときにそこまで心を砕くわけないだろうが。それを作成したのは、お前の隣の席のお人好しだ」

「ああ……………綺麗な方の工藤か」

工藤在処^{くどうあじか}。俺はありっちと呼んでいる。何を隠そうこの不良教師の妹で、ふわふわのくせつ毛が特徴的な女の子。ゆかりんが男性的あるいはクールな格好良さがあるのに対し、ありっちは格好いい要素はカケラもないが、家事万能に加えて気遣いもできる、女性的な可愛らしさ秘めた逸材なのである。

結婚するなら、ありっちのような女性と結婚したいと思わせるほどに。

「あっはっは。健吾……………ってことは、あたしゃなにかい？ 汚い方

の工藤だとそう言いたいわけかいこの野郎？」

「いえいえ、決してそのようには思っていないので頭を握り潰そうとするのはやめてくださいづあああああああああああああああああああっ！！」

柔道二段、空手二段、合気道三段という、どう考えても人間のスペックでは在り得ないゆかりんは歯向かう人間に対してまるで容赦しない教師だった。

と、その時だった。

ジャギヤア！！

高速で飛来したなにかが、俺の頬を掠めて通り過ぎる。

そして、アパートの向かいに立っている木に命中すると同時に、

その木は真つ二つに裂け、轟音を立てながら左右に分かれて倒れた。「敵対反応を確認。護衛対象の危険度が3に移行したため、これより武力行使による排除を開始する」

なにやら聞きたくない声が耳に届く。

恐る恐る後ろを振り返ると、二トリもんと名乗った少女はなににも映さない透明な無表情のまま、ゆっくりと歩を進めているところだった。

「あの……ニート？ なにしてんだ？」

「武力による敵性勢力の排除だ。なあに、ものの2分で片がつくから安心しろ」

「なに物騒なこと平気な顔でほざいてやがる！？」

いきなりの急展開に、俺の頭はパニック寸前だった。

「ちょ、待て！ 一見性質の悪いヤクザのように見えなくもないが、アレは俺の学校の担任の教師だ！ 今のもスキンスリップの一環のよーなもんで別に殺意はない！」

「ヤクザってのは私のことかおい。大体、このちっこいのはなんだ？」

「えっと……そのですね。その子は、最近遊びに来た親戚の」
「肉奴隷だ」

あっさりど、当たり前のようにほざいた小娘は、ちよつと得意げだつた。

時間と、空間と、あとなんか色々なものが凍りつく。ゆかりんはなんだか絶望的な表情を浮かべて俺を見つめ、俺は涙目になりながら首を横に振るのが精一杯だつた。

全てが凍てつく空間の中で、ニートはにやりと口元を緩めた。

「まあ、それは性質の悪い冗談だ。本当は彼女なのだ」

「そつちはそつちでやべーんだけど！ つーかさつきから嘘八百並べてんじゃねーよ！ 俺の人格とかが疑われるだろうが！」

「大丈夫だ。たとえここで嘘八百並べようが、あのゆかりんという女はほどなくこの世界から消失する。私は《彼に触れる女は全員八つ裂きにするくらい勢いで禁則事項》の任務を果たすだけだからな」

「なんか裏舞台が透けて見える発言があつただけどおおおおお！？」

「安心しろ。お察しの通り私を製作した少女はヤンデレだ」

「ぎゃあああああああああああああああああつー！！」

ヤンデレ。「病み」と「デレ」の合成語であり、広義には、精神的に病んだ状態にある相手が愛情を表現する様子をいい、狭義には、好意を持った相手が次第に精神的に病んだ状態になることをいう。

……まあ、そういう相手に好かれた場合、後の展開は大体ご想像の通りになり『中に、誰もいませんよ』などの名言を残すことになる。いやいやいやいやいや、待て。それはあくまで極端な例であつて、現実にはそんな女性に好かれることはまず稀だからね！ 落ち着け、パニくるな。素数だ、素数を数えるしかない。素数を数えれば俺はK O O L（誤字ではない。気になる人はぐぐれ）になれる。素数は1と自分自身でしか割り切れない数。俺に勇気と希望を与えてくれる。

と、俺がなんとか落ち着きを取り戻そうとしていた、その時。

ゆかりんは、不意に獰猛な笑顔を浮かべた。

「ま、事情は分からないし、そのちびっ子がなんなのかはどーでもいいんだケド……ねえ、ちびっ子。つまりアンタは私を物理的に排除しようとしてるわけか？」

「排除ではないな。抹殺するんだ」

「なるほどねえ……」

にやりと笑いながら、ゆかりんは一步を踏み出し

次の瞬間には、二トを中空にぶん投げていた。

そして、空中に浮いている少女をサッカーボールのように蹴り飛ばし、壁に打ち付けた後に腹をさらに蹴り飛ばし、地面に崩れ落ちる寸前にダメ押しのように蹴り飛ばした。

合計3発。俺が食らったら間違いなく即死するであろう蹴りを食らい続けた二トは窓ガラスを叩き割りアパートから放り出された。「うむ、近代兵器だろうがサイボーグだろうが人間だろうが、ガキつてのは痛めつけて育てるべきだな」

「あ……あの、ゆかりん？ 殺してないよな？」

「当たり前だばか者。私は曲がりなりにも教師だぞ」

ゆっくりと溜息を吐いてから、ゆかりんは俺の方を振り向いて口元を緩める。

「ま……向いてないのは重々承知してるけど、ね」

「そーか？」

「アンタが思ってる以上に、教師つてのは大変なの。テストの問題考えるのだって大変だし、やることは多いししがらみも多い。……アンタも就職する時は、医者と教師だけは本当にやめておいた方がいいぞ。……悩みに悩んだ拳句にテスト問題とか作れなくて、ロクに寝られなかったりするからね」

「……………」

最初から、医者と教師になんざなるつもりは毛頭ないし、そんな頭も持っていない。

俺は今の生活でいっぱいいいっぱいで、他の事を気にする余裕もない。

それでも、言わずにはいられない。

「俺は好きだよ。先生の授業。楽しいから」

「楽しいだけじゃ駄目なんだよ」

「うん、分かってる。でもさ、結局生徒にとっちゃそれが全部だろ？ つまんねー現実かもしんねーけどさ、先生がどんな葛藤を抱えてたって……生徒にとっちゃ楽しい授業が全部で、楽しくない授業なんざ願ひ下げなんだからよ」

「……………」

バイトで働くようになって、少しは働くことの辛さが分かった。

接客の3分で店の印象が決まる。その3分が最悪ならもうそのお客は店に寄り付きもなくなる。こっちがどんなに不機嫌でも、そんなことは客には関係ない。わざわざ来てくれたお客のために、店は心を押し殺して笑顔を浮かべる。

教師だって似たようなもんだらう。

生徒に教えることや伝えたいことをカットして、詰め込んで、45分に凝縮する。生徒にとってはつまらない授業の一つでも、教師にとってはそれが全部。

45分の短い授業で 全部だ。

つまらない授業が大半で、それでもなんとか面白くしようとするゆかりんは、間違いなくいい教師だと断言できる。

……まあ、拳の登場は少し控えて欲しい気分だけど。

俺がそう言くと、ゆかりんは少しだけ口元を緩めて笑った。

「口は達者だな、黒崎。バイトの影響か？」

「生徒の言いたいことなんざそんなもんっすよ。『楽しい授業が一番』とか、さりげなく最難関なことを平気でほざきやがるんだから。その辺は、お客と一緒に」

「なるほどな」

ゆかりんはいつも通りに、にやりと笑う。

俺もつられるように、口元を緩めて笑った。

と、まあそんな具合にいちゃつく二人組をこっそりと監視しながら、ロボットである私は、こっそりと窓の外で溜息を吐いたりする。

しかし……あの教師、人間のくせにどういう戦闘能力だ。ガードが間に合わなかったら危うく破壊されるところだったぞ。

私の名前は二トリもん。近未来型ヒト科ヒト目女型ロボット。

未来からわざわざやって来た理由は極めて単純。それは、お人好しが行き過ぎて死に直面することになる野郎を助けるためだったりする。

男の名前は黒崎健吾。もうなんか……どーしようもない、生き物オースだ。

昨日の時点でぎりぎり。本当にぎりぎり間に合ったというべきだろう。私がすっかり道に迷ったりしなければもう少し早く到着していたはずだけど……まあ、それも計算の内だ。間に合ったのだから是非は問うまい。

私は、健吾を助けに来た。既に私がいた未来は消失しており、その原因は他ならない馬鹿男。既に終わった未来はともかく、他の未来に影響を与えるわけにはいかない。

あいつは……黒崎健吾は、そこまで深いところに関わってしまっている。

たとえばの話をしよう。

ある少女には好きな人がいた。

ある先生には生徒がいた。

二人にはそこそこ大切な誰かがいた。少女にとっては好きな人。先生にとってはわりと好ましい生徒。でも、そいつはある日唐突に

死んだ。なにも残さずいきなり死んだ。

過労死だった。働きすぎで死んだ。

二人はそりゃ自分を憎んだ。恨んだ。一時は自分すらも殺そうとした。自分の罪悪に苛まれて、どうしようもなくなつて最後には世界を憎悪した。

彼を殺した、世界を滅ぼそうとした。

彼女等の行動は的外れとしか言い様がない行動で、結局は責任逃れの現実逃避。

だって……そいつは馬鹿みたいなお人好しで、頼まれたことを断ることすら知らず、無茶苦茶な大仕事でも苦勞しているようには見せない才能を持つている本物の天才で、だからこそ自分の体がどうなっているのかすら自覚できない、極限の馬鹿野郎だった。

あまりにお人良しが行き過ぎて、騙す方の心が痛くなるほどの馬鹿だった。

少女と先生だけではなにもできなかった。しかし、そういう馬鹿を騙すことに心を痛めるような、いい人間やら人外が世界には多すぎた。

健吾がお節介を焼いてきた誰か。そのたぐさんの誰かの手によって……結果、私が生まれた未来は消滅することになる。

私だけを残して、消え去ってしまった。

「やれやれ……面倒なことだ」

と、まあここまでが私の記憶領域に刻まれた記録である。

実際のところどうなのかは私にも分からない。起動前に刻まれた記憶のため、誰かが故意に刻んだ可能性も当然残っている。私を利用して、健吾になにかをさせようと企んでいる輩の可能性だって捨て切れない。

私自身が、彼を消滅の未来に向かわせている因子かもしれないわけだし。

本当に……面倒なことだ。

「おい、ニート。生きてるか？」

「当たり前だ。私があ程度の打撃で死ぬわけがなからう」

窓から顔を出した健吾は本当に心配そうな表情をしていたが、私は無視した。

……さっきまでいちゃついていたくせに、生意気な。

「で、私が生きてるとなんか不都合でもあるのか？ ……いや、健

康な高校生男子にしてみれば性欲の発散とかに不都合があるかな」

「粉々にされなくなかったら頼むから口を慎んでくれ。それより、これからゆかりんがガラス割ったお詫びに肉奢ってくれるっつてよ。すき焼きにするけど食うか？」

少しだけ悩んだが、ここで断つても栄養的にはなんの得もしない。殴られたダメージを回復する上でも、多量のカロリーは必須であると私は判断した。

「うむ、そういうことならありがたくいただく」

「じゃ、悪いが段ボールとガムテープで窓塞いでくれ。俺はすき焼き作るから」

「了解した」

ガムテープと段ボールを受け取って、私は窓の修復作業に入る。

未来技術を使えば修理どころか、以前よりも完璧に直せるだろうがオーバーテクノロジーの乱用は控えるべきだろう。切り倒した木も後で元に戻さなくてはならない。

……しかし、本当にどうしたものだろう。

「なあ、健吾」

「ん、あんだよ？」

「私を最初に見た時、とりあえず警察という発想はなかったのか？」

当たり前前の疑問に対し、健吾は少しだけ考える素振りを見せた後に言った。

「一緒に鍋食っちゃったしな。困ってるんだったら助けても罰は当たらん」

自己満足だよ、自己満足。と言い加えて、健吾は鍋を火にかける。自己満足以前に、泥棒とか、強盗とか、殺人鬼とか、そういう発想はどうやら最初からないようだった。

駄目だ。……こいつ、早くなんとかしないと！

「ん？　なんだ頭抱えてるんだ、二ート。気持ち悪いぞ」

「ロボットにも色々悩みつてもものがある。あと気持ち悪いとか言うな」

「へいへい、悪かったよ。……本当、面白いよなお前」

「……………」

面白いで命を危険に晒しているのでは、割に合っていないと思う。もちろん、そんな私の心の声など伝わるわけもなく、健吾は上機嫌にすぎ焼きの材料を切りながら口笛なんぞを吹いていた。

……ホント、どうしてくれようかこの馬鹿。

いつそのことここで始末してしまった方が未来のためなのかもしれない。

と、私がちらりと思ったその時、健吾は不意に振り向いて言った。

「まあ、本音を言えば最近は独りつても飽きて来たし、居候がいるのも悪くはないなんて思ったただだから気にすんな」

健吾は、当たり前のように、いつものように笑っているようだった。

口元を緩めながら、いつものように『気にするな』と言ったようだった。

思考にノイズが混じる。記憶にある彼の末路を再生して、私はなんとなく納得してしまった。……未来を壊した人たちの気持ちだが、判ってしまった。

ああ、なるほど。

確かにこんないい奴を食い潰す未来なんか、存在しない方がましつてものだ。

「まあ……私には関係ないけど」

ゲームテープで窓を補強しながら、私は私の感情を握り潰す。

私の名前は二トリもん。近未来型ヒト科ヒト目女型ロボット。任務は黒崎健吾の護衛だが、護衛するのは身体・精神を問わない。彼を守るのが私の使命。

その任務の中で、私の感情など不要だ。私はただ彼が負担に思わない程度に、怠けているふりを続ければいい。

もちろん、私が使命を果たすまでそれは続くだろう。

「あ、やべ。焼き豆腐切らしてるか。……ま、なきやないでいいか」

「ばか者！ すき焼きに焼き豆腐がないなど言語道断だぞ！」

「じゃあ、窓の補修が終わったら買ってきてくれ。ついでに白滝も頼む」

「む……まあよからう」

私の戦いは今始まったばかりだ。

なんとなく、既に暗雲が立ち込めていなくてもなかったが、それは無視した。

と、まあそんな風に思っていた時期が私にもあった。

この後、工藤妹が家に押しかけたり、お約束にも私に取って変わろうとするロボットが現れたり、工藤姉の見合いをぶち壊すことになったり、なぜか脈絡も世界観も考えずに吸血鬼が現れたり、私が恋をしていると決め付けた工藤姉妹が大騒ぎをしたりとかよく分からないことになったりするのだが……。

それはまあ、別のお話。

1 騙り…それゆけ二一七ちゃん！ (後書き)

というわけで、二話に続きます。

二話目はおでんの話。お楽しみに

2 騙り・はなをおったはなし（前書き）

予告通り、コメディ風味のおでんの話です。

おでんつつうよりアルコールの話ですが、まあ深くは気にしない方がお得感が増します。

では、どうぞ

2 騙り：はなをおったはなし

「酒さえありゃ、世はなべて事もなし。」

20歳未満は飲酒禁止。

日の出ずる国の御法で、普通自動車の速度違反程度には守られていない御法だろう。

実際、僕がアルコールの類を口にしたのは3つの時だ。その頃は日本には住んでおらず、度の高いアルコールを摂取しなきゃやっていられないような御国で、母親がおでん屋などを営んでいたのだから仕方ないと言えば仕方ない。

そんな生活を続けて8年。母親が死去したのをきっかけにおでん屋台を引き継いで、僕は日の出ずる国へとやって来た。

久方ぶりの帰国だと、母さんなら言ったかもしれない。

奇妙な文化に奇妙な人々。閉鎖的なくせに有用なものはすぐに吸収し、改善した上でさらに試行錯誤。オリジナルは少ないかもしれないが、小手先の技術や小賢しさでは比肩し得る者がいないほど。

しかも、夜遅くまでよく働く。おでん屋としては実にありがたいことだ。

「と、いうわけでお客さん。お酒もほどほどにしておでん食べてもらえませんか？」

「んー……あー、そだな」

一箇所でおでん屋台をやっていると常連さんもつくもので、彼女もその一人だった。

名前は工藤所縁^{くどうゆかり}。近所の高等学校で教師をやっているらしい。今の教師は生徒やら親やら他の教師とのしごらみが多くて大変らしいけど、彼女はそんな中でも生徒の頭をぶん殴れるという特殊技能を持つ、一昔前の珍しい教師だ。

そのせいで、色々としがらみも多いらしいけど。

「んー……っと。そうだな。ぬるめの熱燗と大根。それからこんにやくと竹輪」

「さりげなく飲むんですね」

ほど良く味の染みこんだ大根とこんにやくと竹輪を取り出し、秘伝の辛子と一緒に皿に盛り付けて差し出す。熱燗の方は冷ますまでに少しばかり時間がかかるので、まずは母さん直伝のおでんを賞味してもらおうことになる。

大根を一口サイズに箸で切り分けて、ゆかりさんはその大根を口に運ぶ。

「……相変わらず美味しいな」

「そう言ってもらうと、作りがいつてもんがありますよ」

「まあ、作ってる本人が未成年なのが玉に瑕だな」

「未成年が美味しいおでんを作っちゃいけないって法律は、この世界のどこにもありませんでしたがねえ」

「道德の問題だ、ばか者。将来ある若者が路地裏でおでん屋ってはいかんだろっ」

そのおでん屋で幸せそうにおでんを頬張っている教師に言われたくはなかったけれども、僕は口元を緩めるだけでなにも言わずにおいた。

「なにか言いたそうだな、おでん屋」

「言いたいことは多々ありますが、口を閉ざすのが屋台引きの役目つてもんです。提供できるのは美味しい食事とアルコールと、愚痴を吐く時間程度しかないのが欠点ですが」

「……相変わらず食えない男だよ、お前は。本当に未成年か？」

「人生経験ではそんなじょそこらの子供には負けない自負はありますが、未成年です」

学校には行ったことがなく、教わったのはおでんの作り方と美味しいお酒の鑑定方法。それから、酔っ払いの話を聞き流す方法。

この屋台に必要なのは、たったそれだけ。それで十分すぎる。

「一点特化型の人生ですけどね、ちょっと気に入ってるんですよ、この生き方は」

「……羨ましい限りだな。私は今の生活を全然さっぱり気に入っていない」

「最近まではわりと楽しそうにしてましたけど、なにか悩み事でも？」

「あー……悩み事っつーかなんっつーか、な」

ゆかりさんは僕が出した熱燭を受け取りながら、ゆっくりと溜息を吐いた。

「生徒が、口では言い表せないようなほどの厄介ごとに巻き込まれててね……」

苦渋に満ちたその表情からは、その生徒さんとやらになにが起ったのか想像はできなかつたけど、とんでもないことになっていることはよく分かった。

熱燭をちびちびと飲みながら、ゆかりさんはテーブルに突っ伏した。

「生徒の特別扱いは良くないと思うんだケドさ、妹の親友っつうか妹が好きな男だし、その辺は色々と世話を焼いてやらにやいかんかなと思うんだけどね、いくらなんでも私の許容範囲を楽勝でぶっち切った厄介ごとが頻発するのはどうかと思うわけよ。なんか最近モンスターペアレントどもがうるさいしさあ、両親は結婚しろって見合いをセッティングしやがるし、肌は荒れるし食欲は出ないしストレスは溜まるしで、もうたままないわ」

「かなり追い詰められてますねー」

「……普通、こういう時ってテキストでもなんでも慰めてくれるもんじゃないか？」

「慰めて欲しいんですか？」

「……………」

おや、黙り込んでしまった。どうやら、心身ともに相当追い詰められているらしい。

僕は口元を緩めて苦笑してから、頑張っている女性の頭にポンと手を置いた。

「仕方ないですねえ。ゆかりさんは甘えん坊みたいなので、僕が面白い話を聞かせてあげましょう」

「誰が甘えん坊だコラ。こう見えても我慢強いっちゅーねん。長女なめんなよ」

「まあまあ、そう睨まずに」

僕はにつこりと笑って、いつも通り、誰も聞いてくれない話を語ることにした。

面白くてつまらない……そういう話を、騙ることにした。

おでん屋という職業柄ですがね、僕は色々な場所に行ってきた。た。

ただ、まあ寒いところの方が多かったですね。寒ければおでんもお酒もよく売れる。火さえあれば水には困らないし、おでんを売り歩いていれば飢えることもそれほどありません。中にはおでん屋台ごと奪おうとする盗賊や不貞の輩もいましたが、彼等もそこそこいいお客でした。主に財布の中身の意味ですが。

そんな中に、奇妙なお客様がいらっしやいました。

ぶかぶかのローブには似合わない、ぞくりとするほどの美しい顔立ち。背丈は低いのですがそれを補って余りあるほどの色気というか、なんとというか、とにかく魔性を秘めた男性なんだか女性なんだかよく分からないナマモノでした。

え？ ああ、僕は基本的に美少女とか美少年とか大嫌いなんですよ。顔がいいなんて生まれながらに既に卑怯じゃないですか。顔がいい奴はいい奴なりに努力しているとか、それなりに大変とかそういう意見は一切認めない。あ、一発ぶん殴らせてくれるなら認めま

しょう。その一発で鼻を妙な方向に折り曲げてやりますがね。

で、まあそのナマモノは店にやってくるなり、いきなりウイスキーとか注文するんですよ。いえいえ、僕だっておでん屋の端くれの木っ端の隅っこの風下なんで、普通にウイスキーくらい常備してますがね？ それでもいきなりウイスキーってのは果たしてどうなんですかね。いえいえ、僕も客商売ですからね。『大根食え八ゲ』とは言いませんよ？ 言いませんがこう……空気つてものを察して欲しいところです。

しかしまあ、その顔がいいだけのナマモノが頼んだのは生ハムメロンですよ。僕だつて客商売ですからね。そのナマモノの頭髪を残らず引き抜きたい衝動に駆られながらも生ハムメロンを用意しましたよ。え？ なんておでん屋に生ハムメロンがあるのかって？ そりゃ客商売なんだから、お客様が食べたいものは大体用意しますよ。仕入先は主に近所のスーパーとかですが、酔っ払いはおおむね気がつきませんね。そのナマモノもウイスキーじゃなくて老酒とか出したのに全然気がつきませんでしたし、気がついていたらとしても正直知ったこっちゃないです。食べちゃえばみんな一緒です。

それから、そのナマモノは僕を試すかのように色々注文しましたね。飛騨牛のステーキとか、魚沼産コシヒカリのご飯とか、マカロニグラタンとか、真鯛の刺身とか。え？ いやいや、さすがにこのあたりになるとスーパーじゃ仕入れることは不可能でしたので、ステーキは近くの精肉店から頂戴し、コシヒカリはコシイブキで代用しました。魚沼産かどうかなんぞ、地元の間人じゃないと分かりやしませんよ。コシヒカリとコシイブキの違いすら分からない人間が多い昨今ですからねえ。マカロニグラタンは適当に新婚の熱々カツプルから拝借し、刺身に関しては漁師が一本釣りで釣り上げたものを横取りしました。

え？ それは泥棒じゃないかって？

嫌だなあ。評判落とされるくらいなら泥棒なんぞ屁でもありませんよ。……屋台つてのは、評判落とした時点で見ても無残な最期が

待つてるもんですからね？ あと、姿さえ見られなきゃ犯罪は立証
できませんからね。

そんなこんなで時間も経った後、そのナマモノは立ち上がって口
元を緩めました。

そして、とても綺麗な笑顔でこんなコトを言ったのです。

「うん、実に美味しく楽しい夜だった。そうだな……お礼がしたい
から、今欲しいものを言ってくれないかな？」

僕はにっこりと笑い返して、いつも通りに言いました。

「勘定払え、ハゲ」

「で、お勘定が払えなかったそのナマモノは、僕の鉄拳制裁により
鼻をいい感じに折り曲がってしまったました。めでたしめでたし」

「めでたい要素が何一つねーんだけど！」

「世の中舐めた人間の鼻が在り得ない方向に曲がったんですよ？
なんかこう、ちょっと愉快的気分になりませんか？」

「ならねーよ！ どんだけ根性曲がってたんだ、お前は！」

「えー？ あんだけ人のこと馬鹿にした真似されたら、誰だって血
が噴水のように噴き出るくらいにぶっ叩きますよう。ゆかりさんだ
つて、学年主任の顔をフルパワーでぶん殴れたらどんなに気分が
いいかって思うでしょ？」

「そりゃまあ……って違う！ 一瞬納得しそうになっちゃったじゃ
ないか！ あたしが言いたいのは、人としての心構えであってだ
な……」

「はい、それじゃあつまらない話を聞いてくれたお礼に、つくね串
とハンペンをサービスした上、ものすごく美味しいお酒を一杯だけ
奢っちゃいましょう」

「人の話を聞けこら！」

怒鳴りつつも、ゆかりさんはしっかりと僕が差し出したお猪口と

つくね串とハンペンの乗った皿を受け取った。

「ちやつかりしてるといっかなんというか……こういうところは見習っていききたい。」

「やれやれと溜息を吐きながら、ゆかりさんはお酒を口に含んだ。」

「大体お前はな……未成年のくせにつてなんじゃこりゃあああああああああつ!?!」

「あれ、その日本酒美味しくなかったですか?」

「逆だ阿呆! なんだこの酒は! ちよつと尋常じゃないくらい美味いんだけど!」

「をつほつほ、大吟醸の生原酒を格安で仕入れたので試飲を……つて、なんすかその妙に怖い目付きは。言っておきますけど、一杯だけですからね?」

「……未成年」

「へ?」

「いやいやいやいや、あたしだつてアレだよ? そりゃ先生とかやつてるからね? 未成年の飲酒を止めるのは義務つてもんでしょ。」

「多少は心苦しいけどね、先生としてほら、没収とかしなきゃいかんと思いました」

「いや……こつちも客商売で……あの、ゆかりさん!?!」

「いーから飲ませろ。たまには酒でいい思い出を作らせてくれ。もう一杯目はビールとか悪しき風習は死んでくれ。苦いんだよ。アルコールが鼻につくんだよ。喉で飲むつてなんだそりゃ、味覚の完全否定か? なんでテキーラを飲む。なんで限度を弁えない。なんで救急隊員と店員にあたしが説教されるつ?! 死ね! 学年主任と酒を飲む学生はみんな死ね! 可愛いのはおでん屋だけかこんちくしょう!」

「なにか言い返したかつたけど、『味覚の完全否定か?』のあたりで僕はゆかりさんに首を絞められていたので、なにも言えないつていっつか救急車。」

「うーん……やつぱり酔つ払いの相手は何年経つても慣れません。」

薄れていく意識の中で、僕はそんなコトを思っていた。

ぶかぶかのパーカーに、ロングスカート。髪の毛はいつも通り太い三つ編みにまとめ、眼鏡は変装にかける程度。

いつも通りのいでたちでボクは夜の街を歩いていた。

ボクの名前は式部キリカ。真正悪魔とも聖魔（聖なる魔。純然たる魔の意）とも呼ばれていた、絶望だか邪悪だかよく分からないモノから生まれでて、若気の至りで色々と悪さをした拳句、おでん屋に封印されたという経緯を持つ、世界でも有数の情けない存在。

とはいえ、そのおでん屋にも温情はあったのか、新月の晩だけ外に出歩けるようになってもらったことは実にありがたい。

たまには、悪魔だって食べたいものを思いつきり食べたいもんだ。カップ麺じゃなくて、出店のラーメンとか。

しかし、残念ながらボクは少食なので食べたいものは慎重に選ばなくてはいけない。ボクが住処としてある学校のレッドフェザー共同募金の箱からコツコツとせしめたお金があるので大抵のものは食べられるけど、たまには普段食べられないものを食べたい。

「ん？」

と、不意に目に留まるのは、裏路地で美味しそうな匂いを放つおでん屋台。

そのおでん屋台の座席にはボクを封印したおでん屋の主人と、なんだか幸せそうな表情で一升瓶を抱き締める、どこかで見た覚えのある女教師。

んー……邪魔しちゃ悪いかな？

「別にいちやついでるわけじゃありません。酔っ払いの介抱です」「相変わらず難儀してるねエ、君も」

気配でボクのことを察知していたのか、あるいは最初からボクのこと気づいていたのか、少し疲れたような様子を見せるおでん屋はそれでも口元を緩めていた。

「おでん、食べていきますか？ ……座席は使えないので、普段僕が使っているパイプ椅子を使ってもらうことになりますけど」

「ん、じゃあご馳走になるのかな」

「ご馳走とは言いつつも、このおでん屋が奢ることはまず在り得ないので、そのあたりは期待はしないでおく。以前は勘定を払わずに欲望を叶えてやろうと思ったら、見事に鼻っ柱を物理的にへし折られた。」

世の中は広いとだけ思っておくことにした。

パイプ椅子を取り出して座り、続いて小皿を用意。辛子は具によって少々つけることにして、割り箸を割っていただきます。

今日は珍しく牛筋の煮込みがあったので、それと大根をいただくことにする。

「……生ハムメロンとか食べないんですか？」

「んー、デザートはイチゴ大福で主食はおでんの気分なのさ。それに……まあ、たまにはいい思いをしてる苦労性のおでん屋主人を見るのも悪くは無いね」

「いい思いはしてませんよ。酔っ払いの介抱です」

「いやいや、好みの女性に膝枕しながら、柔らかい髪の毛とかに触れてたキミは間違いなくほんのチョッピリ幸せだったはずだよー」

「」

「ぶっ殺すぞ、クソ悪魔」

「やーん」

「凶星だったのか、本気一歩手前くらいで怒る普段は忍耐強いおでん屋の主人。」

「ま、茶化すのはこれくらいでやめておくでしょう。今のボクはともお腹が空いています。別に吸血鬼でもなんでもないけど、悪魔だっってお腹が減る。」

「そう……おでんがなければ人間を食べればいいって程度には、ね。」

「クソ悪魔。また酷い目に遭いたいんですか？」

「ボクの思考を読んだみただけで、残念ながら今のボクはおでんに夢中です。パンがあるならパンを食べればいいのさって具合にね」
牛筋と大根を美味しく頂いた後は、メインディッシュに突入です。
たまご卵タマゴ玉子たまご卵タマゴ玉子たまご卵タマゴ玉子たまご卵タマゴ玉子たまご卵タマゴ玉子たまご卵タマゴ玉子。

「よし、こんなもんかな」

「食いすぎです。後のお客様のことも考えやがれ。20個も食ってんじゃねえ」

「食べたいものを食べるってのは、悪魔なりの流儀だよ。キミだつておでん屋の主人のくせに、気に入ったお客に大吟醸の生原酒とか奢ってるじゃん？」

「……いや、あれは奢りっていうより強奪なんです」

「まあまあ、ちゃんとお代は払うから心配しなくても大丈夫。いつそやのように欲望と等価交換しようとは思わないから」

「……」
おでん屋はゆっくりと溜息を吐いて、空を見上げる。

「お客さん。一つ聞いていいですかね？」

「ボクに答えられることなら、なんなりとどうぞ」

「どうして、大人ってお酒を飲むんですか？」

「時間がないからだよ」

にやりと、悪魔なので悪魔らしく、ボクは笑う。

「単純な足し算さ。仕事の時間は企業にもよるけど、平均で8時間程度。休憩を含むと9時間。残業を3時間すると12時間。睡眠時間を6時間とすると18時間。……さて、ここで問題だ。残りの6時間を遊びやらなにやらに使えるけど、ここから食事や入浴や明日の準備やらを差し引くと、自分のための時間は何時間残るかな？」

「……………」
「酒でも飲まないとやってられないのさ。でなきゃ、長い歴史の間でアルコールなんて不味い飲み物が残るはずないだろ？ 必要だか

ら、残っているのさ」

そう言いながらもオレンジジュースを手酌で飲むあたり、わりと説得力がないと我ながら思う今日この頃。

おでん屋の主人はゆっくりと溜息を吐いて、夜空を見上げた。

「……大変ですね。生きるってのは」

「そりゃそうだよ。殺し合わない代わりに協力し合う。そっちの方が大変さ」

「じゃ、たまには奢りにしましょうか。今日はわりといい日みたいですし」

「んー……そうだね。おでんが奢りなんて、今日はとてもいい日みたいだ」

「でも、卵のお代は払えよ teme。20個は食べすぎです」

「あ、やっぱり？」

苦笑いを浮かべながら、ボクは肩をすくめて卵を齧る。

空には月はないけれど、それに見合った卵の黄身。お酒はないが、幸せそうにしているおでん屋の主人と膝枕されている女教師を見ているだけで十分にお釣りがくる。

と、不意にお釣りを3倍にするいたずらを思いついた。

「ねえねえ、おでん屋さん」

「……なんですか？」

「はい、これ。女性に受けるプレゼント。おでんのお礼だよ」

魔力だかなんだか超常的な悪魔力で織り上げたのは薔薇が一輪。もちろん万国旗が出る不思議仕様である。

「とりあえず、今はこれが精一杯ですけどね」

「ベタベタですね。ま……もらっておきます。明日にはゴミになってそうですか」

「よくあることです」

翌日に枯れる花があれば、翌日に食べられなくなるおでんもある。そういうものを差し引きながら、人間とか悪魔は生きていく。

月の代わりに卵の黄身で、酒はないがつまみはある。目の前には

ほんのちよつと不幸なおでん屋の主人が少しだけ幸せそうに笑っている。

ま、たまにはこんな日も悪くは無い。

風情のある夜じゃないけれど、今日は本当にいい日だった。

明日もいい日でありますように。

2 騙り：はなをおったはなし（後書き）

というわけで、2話が終了。3話に続きます。

今回はバッドエンディングの話。続投キャラは言わずもがな悪魔です。

3 騙り：バッドエンドへようこそ (前書き)

急にヘタレ男を書きたくなっただ。

あと、書いてる間にミステリーとか本当に無理だと分かった。トリックとかロジックとか考えるのは本当にめんどいので、おおむね挫折したと思いました。

毎週だましましたまじやっっている見た目は子供、頭脳は大人の彼は本当にすごいと思うけど、あの漫画の連載中に加害者と被害者含めて一体何人……な、なにをするきさま！。

というわけで、若干コメディ分は不足しておりますが、よろしかったらどうぞ

3 騙り：バッドエンドへようこそ

死んでしまいたいと嘆く貴方。

生きているのが辛いと泣いた貴方。

なんで生きているのか分からない貴方。

なんで死なないのか分からない貴方。

この物語を、そんな貴方に捧げます。

いっぺん、死んでみる。

たとえば、貴方が世界にとっての不要物であるとしよう。

不要物とは、読むのか読まないのか微妙な参考書や、使い古した靴や、着なくなった衣服といったような『微妙に要らない物』とは性質を異にする物だと私は思っている。

自分にとって不必要なもの。それが、不要物だ。

あってもなくても同じものでも、取っておいても構わないものでもなく、『要らない』と分類されたもの。……有体もなく言葉を選ばずに表現するなら、それはゴミ以外の何物でもないだろう。

(……ヤクタイがない、ことを……考えてる、わね)

思考しているのは誰だろう？ 私は既にここにいないはずなのに、いや、正確にはここにはいるのだろう。ただ、私が私でなくなっているだけのこと、現実ここで雨粒を冷たいと思っているのは、私なのだから。

(回り道も、いいとこだわ……ったく)

信じたくない気持ちを抱いている自分に少し腹を立てる。

こんなものはとっくの昔に……3回目くらいに慣れてしまったよ
うな気がする。こんなことになったのも1回や2回じゃない。だか

ら慣れている。そう思いたい。

……そう、屋上から突き落とされたのはこれで通算10回目くらいだろうか？ いや、桁が違ったような。いやいや違うわけじゃない。40回の大台に到達しただけだ。

ぐちゃぐちゃに潰れた体を動かすことすらできずに、最後の力で私は苦笑する。

刺殺23回、撲殺73回、毒殺2回、事故に見せかけて殺されたのが13回、墜落死……今回で40回の大台到達。通算151回ほど死んでいる私は、最後の最後になにもできないことをよく……それこそ身に染みて、知っている。

なんでこんなに死ぬのかはよく分からない。多分、世界ってヤツを擬人化すると性根が腐り切った変態で私が苦しんで死ぬのを見て悦に浸っているような野郎に違いない。

死ねない私を見て、嘲笑ってやがるに違いないのだ。

私は悪魔に魅入られた。

悪魔みたいなヤツじゃなくて、私に付きまとうのは正真正銘本物の悪魔。

鮮血のように真っ赤な眼、御伽噺のヒロインみたいに真っ白な肌、抜けるような真っ白な髪。角は当然のように生えていて、顔立ちは可愛らしくて愛らしく、ついでに言えば声を聞いているだけでもうたまんなくなつて、悪戯っぽい笑顔を見た瞬間に理性が破裂しそうになる。

それは、私の一目惚れとかそういうのではない。ヤツ曰く『ボクには常に魅了の魔術がかかっているの、仕方がないのですよー。フリフリ』ということらしい。

ちなみにフリフリには意味はない。悪魔は意味がないことをよく口にする。意味がないくせに私を妙に苛立たせる悪魔の言葉の数々は、その悪魔自身が浮かべる身も蕩けそうな笑顔で相殺されてしま

っている。腹立たしいことだ。

悪魔の名前は式部キリカ。キリカという字はどう書くかは知らない。恥ずかしいから言いたくないんだと思いたい。

「……………げぶっ」

肺から押し出されたまっかな液体を吐き出して、私は自分がぐちゃぐちゃになつていゝことを確信する。手足は奇妙な方向に曲がり、体は……………まあ、そこまで考えなくてもいいだろう。どっちにしろ致命傷だ。

意識がぐらりと暗転する。もうそろそろお迎えが近い。

体の破壊はとつくに痛みの許容量を超えている。痛みは感じずに私は死ぬのだろう。

目が見えなくなり、感覚が消えうせて、私はびくと痙攣する。

死の震えは怖くない。怖いのはむしろこの後だ。

目を閉じて私は死を受け入れ、いつも祈るのだ。

ああ、神様。

どうか私を殺したヤツ（これからは通称『敵』と呼称。私を殺した奴なのだから敵以外の何者でもないだろう）が、非道い有様で死にますように。意味もなく拉致監禁とかされて心の奥底から腐敗していくような酷い目にあつた挙句、親友とかそういう大事な物を目の前で破壊されて、絶望と憎悪と無力感の中で髪の毛からつま先まで少しずつ少しずつ摩り下ろされて死にますように。

もみじおろしてみたいになりますように。

……………まあ、なんだ。

こんなことを思つてしまつたあたり、私もまだまだ大丈夫なのだろう。

自分を殺した相手に、まだ殺意を抱けることに……………私はいつも安堵を抱く。

151回ほど殺された。

それでも、私は死にたくないといつものように思っている。

式部キリ力作、悪魔的ルール。

一つ。以下のルールはボクの部屋こと悪魔の密室を発見した人間全てに適用される。

一つ。この部屋の名を悪魔の密室という。この部屋を発見した人間は、部屋を常識の範囲で自由に利用する権利を有するものとする。

一つ。悪魔の密室内では死の概念が存在しないため、決して死ぬことはない。お腹も空くし刺されれば痛いし歳も取るけど、決して死ぬことはない。

一つ。悪魔の密室に出入りは自由。ただし、必ず誰か一人残らなければならぬ。

一つ。悪魔の密室を発見した者が学校の敷地内で殺害された場合、殺害された人間に対し自動的に蘇生^{レイス}がかかるものとする。

一つ。蘇生がかかった場合、『死亡が確定した日』まで時間を逆行する。死亡が確定した日とは、『誰かに明確な殺意を抱かれた日』のことである。つまり事故死にはこの法則は適用されない。くれぐれも事故には注意すること。注意一秒怪我一生なのです。

一つ。時間を逆行した場合、逆行する以前に起こした行動の全てはキャンセル（行為、記憶等は全てなかったことになる）される。例えば、4月4日の夜に殺されて、4月2日の朝まで逆行した場合、殺される前に過ごした4月2日の朝、4月4日夜の行動は全てなかったことになる。ただし悪魔の密室内に限ってはその限りではない。残しておきたい記録、遺言、痕跡、告白等があった場合はボクが管理するけど、あんまり過度な期待はしないように。

一つ。殺意の根源が取り除かれない限り、殺害された人は殺され続ける。殺される度に上記の蘇生と時間の逆行が起こるため、なるべく早めの対処が望ましい。

一つ。悪魔の密室に来る場合は、3時のおやつを持参すること。

一つ。やらしいこと禁止。ただし、可愛い女の子か可愛い男の子

なら無問題。

一つ。仮にボクを新月の晩以外に外に連れ出した場合はえらいことになるので気をつけること。

以上。

俺の名前は竜胆凧葉。少々難儀なものを背負っているっぽい男。

女っぽい名前で、女の子みたいな外見をしているためよく誤解されるがれっきとした男だ。ただ、女嫌いという点は少し珍しいかもしれない。

猫のようなつり目に眼鏡。背中できくった長い髪は単に切るのが面倒なせいだ。背は男子の中ではそこそこな170センチ。紳士の嗜みたるお髭は生えてくることすらなかったのが残念でならない。

鏡の中にいる自分を穴が開くほど見つめて、俺はぽつりと呟いた。「……そうだよ。やっぱり髭は要るよな、うん。髭さえあればもつと俺は有意義かつダンディな人生を歩めたはずなんだ。シェーバーでぎゅいーんじょりじょりとか髭を剃ってみたい。ふさふさの髭をえらそうに撫でてみたい。そう、髭があればなにもかも変わる。あのひ弱だった彼も髭さえあれば今日から紳士になれる。間違いない」「あんなむっさいもの、なぎちゃんには必要ないですよー。あははー」

ぱりぱりもつきゅもつきゅという音を響かせて、かりんとうを口いっぱい頬張って食べている部屋の主は朗らかに笑う。

式部キリカ。キリカは漢字でどう書くかは不明。多分ものすごく恥ずかしい字を書くに違いないと勝手に思い込んでいる。外見は美少女だか美少年だかよく分からないほど整っている。服装は毎日違うが、体のラインを出さないようなぶかぶかな服を着てるのは共通している。もっとも特徴的なのは首につけられた真っ赤な首輪と頭から生えた二本の角で、この角に触ると途端に弱キャラに変貌する。……どうやら、人間で言う足の裏くらいに敏感らしいのが原因だと

か。

ちなみに、好きなものは甘いものと漫画。嫌いなものは苦いものと小説で、なぜかおでんに限っては特定の屋台じゃないと絶対に食わないという奇妙な嗜好の持ち主だ。

キリカはにやりと悪魔的に笑って、僕の目を真正面から見つめた。「大体、なぎちゃんはそんなに可愛い顔なのに、お髭なんてもったいないですよ?」

「……その《可愛い顔》ってのがコンプレックスな人間の気持ちなんだ、悪魔に分かるかよ」

ぼやきながら、俺は鏡をテーブルの上に置いて溜息を吐く。

悪魔。……あくまで自称ではあるが、式部キリカは悪魔である。

大昔に悪魔払いだか悪魔殺しに封印された、「超」やら「大」がつくほどの悪魔で、本人曰く下手をすると魔王になっていたほどの逸材だとか何とか。ただ、全部キリカから聞いた話なので、事実かどうかは定かではない。

ただ、一つだけ確実なのは、式部キリカがこの部屋の主だということ。

部屋。……俺がいるこの部屋はキリカ曰く『悪魔の密室』というものらしい。

部屋というには少々広い空間で、一部屋の広さは大体六畳一間程度。それが三部屋あり、なぜかキッチンまでついている。おまけに電気まで通っており、冷蔵庫にはいつも食品が満載されているのだからもう訳が分からない。

キリカ曰く『空間認識上におけるズレとブレを利用した偽称結界』ということらしいのだが、理論を聞いてもさっぱり分からないのでいつも軽やかな相槌と共に聞き流すことにしている。

どんなに難しいことを言おうが、キリカ自身はぐーたらな悪魔っぽい生物なだけだし、こうやって眺めているぶんには害はない。

悪魔の密室というのも、宿無し男の住居としては申し分ないし。

「なぎちゃん、次はドーナツがいいと思うのですよ 油と砂糖で

ギトギトの、カロリー満載で胸焼けしそうなやつ」

「なんでそう嫌な物言いしかできないんだよ、お前は」

「むう……じゃあ、なぎちゃんていいのですよ」

「……いや、食べ物の話だよな？」

「くっふっふ」 さーて、どうでしょうかにやー？」

一目惚れしそうな笑顔を浮かべて、キリカは悪魔的に目を細める。

「キリカは、なぎちゃんがOKならいつでもおっけーなんですよ？」

「なにがおっけーなのかさっぱり分からないが、とりあえず俺の返事は6つだ。断固として断る。無理。残念賞。NG。ありえん。死ね」

「……むう、なんとなく分からなくもないけど、一応理由は聞いておきたいかな」

「ワニの口に手を突っ込むような馬鹿は、先輩だけで十分。つーかお前、そもそも男か女かもよく分からないじゃねえかよ」

「性別はまああるようなないような？」

「疑問符がついた時点で男でも女でもないだろ。悪魔は悪魔らしく、虎視眈々と機会だけ狙ってる。この部屋から出ない限りはなんにもできんだろっし」

キリカが書いたルールは数あれど、その中にはキリカ自身のこと含まれていない。

たとえば、この部屋は悪魔であるキリカを閉じ込めるために作られた部屋であり、そのためにキリカには首輪がつけられている。

首輪がついている限りキリカは部屋から出ることはできない。

そして、部屋から出るためには誰か一人犠牲にならなくてはいけない。

悪魔のクセに極めて人懐っこく、人恋しく、寂しがり屋のこいつに、だ。

もしかしたらキリカがそう演じてるだけかもしれないが、それでもひでえことしやがると思うのは……まあ、人としては間違ったことじゃないだろう。

「なぎちゃんは優しいにゃー　ちゅーしていい？」

「やめれ。……つーかお前、前々から思ってたんだが、もしかして俺が眠ってる間になんか口では言えないようなことをやってないか？」

「……んー、なぎちゃんは寝顔が可愛いので、見てるだけでわりと満足なんだけど」

「……………」

そういうことを口に出されると、正直へこむ。

まるで男らしくないと言われてるみたいだ。……いや、むしろ言われているのか。

と、俺がちよつとばかり絶望していると、外へと続く扉が重い音を立てて開いた。

「相変わらず元気ね、君たちは」

腰まで届く長い髪、切れ長の目、不機嫌そうな表情、紺色の可愛い制服を思い切り黒く染めた改造制服はいつも通り。男が思わず振り返るほどの美女ではあるが、常に殺意のような鋭い気配を放っているため誰も近寄らない。美少女ヤクザ。

等々力歌子とごろきょうたけというのが、彼女の名前だ。

歌子先輩は、キリカのアート読書である男女が卑猥な行為に勤しんでいる本を優雅な仕草で拾い上げ、まじまじとじっくりと観察した後、俺たちの方を振り向いて口を開く。

「この本、要らないなら後学のためにもらっていいかしら？」
等々力歌子。高校三年生。見た目は超絶美女に見せかけたヤクザ。
最近の趣味は、読書だった。

起きて時間を確認すると、前日の朝だった。新聞の日付も見事に前日のものだったし、テレビ欄も間違いない。4コマ漫画は昨日間

違いなく読んだものだ。

それはつまり……先輩は今回めでたく151回目の死を迎えたということ。

「イイイイヤホッオオオオオオオオオオオオ！ さすがは犯人、俺に出来ないことを平気な顔でやってのけるっ！ そこに痺れるあこがれるっ！」

「……………」

「歌ちゃん。そんな無言で拳を握り締めなくても、なぎちゃんが女性嫌いなのもう知ってることでしょう。このやり取りも151回目だし」

「……………151回目でもむかつくのよ。毎回微妙にバリエーション変えてるし」

歌子先輩はそう言いながらゆっくりと溜息を吐いた。

ちなみに、俺が心の底から喜んでいるように見えるのは嘘でもブラフでもトラップでもフラグでもなんでもない。

キリカの言うように、俺は女（一部除く）が嫌いだ。

先輩は中でも筆頭で死ねばいいと思っている。

「風葉くん。前々から思ってたけど、女性になんかトラウマでもあるの？」

「いや、本質的に嫌いなだけ。性根が腐ってない女なんざ、今のところ上の姉ちゃんと下の姉ちゃんしか知らないし」

「……………シスコン」

「否定はできないけどよ、じゃあ先輩はバイトの給料を募金箱に突っ込むような真似ができる女なのか？」

「やるわけないでしょ。馬鹿じゃないの？」

「先輩はぜひ砂漠でラクダに逃げられて死んでください」

ケケケと下級悪魔のように笑ってから、俺は目を細める。

悪魔の密室。言い換えれば俺とキリカと先輩だけが支配する秘密基地。水道も電気もガスも通ってる。もちろん冷暖房完備。今は冷蔵庫に食料もたんまりあるし、テレビもパソコンもインターネット

をする環境も完備している。座り心地のいいソファもある。

長話をするには、うってつけの場所ってことだ。

冷蔵庫から取り出したオレンジジュースを先輩に手渡しながら、俺は今一番重要かつ肝心なことを聞き出すために口を開いた。

「で、今回はなんで殺されたんだ？」

「さあね。私になにをやらかしたのか、私が殺されるまでは分からない。なぜか『死因』だけは記憶しているけど……どうして殺されたのか、『動機』までは分からないわ。ついでに言えば、殺されるような心当たりも無い」

「……死因からなにか辿れないか？」

「今回は墜落死。多分、屋上から突き落とされたのね」

「……」
墜落死、ね。また味気ないというか、ありきたりな殺し方だ。

悪魔の密室にいる間は、『外』でいくら時間がループしようとも影響は受けない。時間の逆行から考えて、先輩が誰かに殺意を抱かれたのは今日の朝。で、殺されるのは今日の夜。決意から決行まで中途半端な間が空いているが、多分躊躇しているからだろう。

人は人を殺さない。社会に従っている人間ならなおさらのことだ。「ま、それはともかく時間はないな。先輩を実際に殺したってことは、相手の殺意は半端じゃない。……いくらループがかかるからって、学校外で殺されたらアウトだ」

「分かってるわ」

「いつそ悪魔の密室に逃げ込むって手もあるけどな。殺意なんて一時的なものだ。一週間もすれば冷めて忘れちまうよ」

「……もし、忘れられてなければ、一週間で水泡に帰すわね」

「……」

そう、一週間忘れられていなければ　また殺される。

殺されて生き返って殺されて生き返って……繰り返している内に精神は磨耗する。同じ日々の繰り返しは確実に人間を消耗させる。変わり映えのしない日々には耐えられても、『全く変わらない日々』

に、人間の精神は耐えられない。

キリカ曰く、悪魔の密室の利用者は今までに俺たちを含めて7人。そのうちの3人が自殺し、1人はキリカに食われ、1人は現在に至るまで健康的で文化的な最低限度以上の生活を送って幸せに暮らしているだろうとのこと。

(……つまり、この部屋を利用してはいる限り、死にやすくなるってことか?)

もちろん、キリカの話した過去の話が嘘ではないという保証はない。しかし先輩が151回ほど殺されているという事実。それを考えればキリカの話にも信憑性が出てくる。

だが……その反面、俺は別に誰かに殺されたりはしないのだが、バイトの時以外は悪魔の密室に引きこもっているせいだろう。怪しまれないように、学校の制服はあるツテを使って入手しているが、俺は別に学校に籍を置いているわけじゃない。

言ってしまうえば……真の意味での不法侵入者だからな。

「ま、俺にはどーでもいい話だけどな」

「……ホント、君って冷たいのね」

「ハ、冷たいんじゃない。女が嫌いなんだ。大体、謝礼もなしに助けてもらおうとか救ってもらおうだなんて、そんな都合が良すぎるってもんだろ？ 悲劇のヒロインは悲劇のままに終わるもんだし、熱血バトルものは主人公の勝利で終わり。お約束するのは大事にせにゃいかんよ」

「キリカ。謝礼とか言いつつ、これは間違いなく肉体を要求されるのよね？」

「うん、間違いはないね。でもそれは仕方のないことなんだよ。男の子だもん。えっちな本も読むしえっちなゲームもするしえっちなDVDも見るのは当然のことだよ。なぎちゃんは女の子の性格は嫌いで、乳尻ふとももは大好きなんだから」

「否定はしねーけど死んでくれ！ 砂漠でパスタ茹でて死んでくれ！」

俺は叫んだ。叫ぶことくらいしかできなかった。

そう、俺たちは生きている。生きているからこそ繁殖に興味津津なのは仕方のないことだと思う。心底思う。思っているけど口に出したらそれこそ変態の烙印を押される。

変態にはなりたくないの、叫ぶことしかできなかった。

「ま、まあそれはともかくだな。とにかく、どーせ今回も先輩の自業自得なんだから俺は手は貸さねえよ。何回ループしようが別に俺には関係ないしな」

「……………暗に私の体を要求しているのね？」

「死んでください。本当に死んでください、先輩。先輩が死んでくれるなら、俺はなんでもします。ロードローラー（道路をならす重機。人はぺっちゃんこ）も用意しますから」

「仕方ないわね。とりあえず、前金で10万円でもいい？」

「……………え？」

「確かに、君の言う通りね。命つてのは安くはないわ」

やれやれと溜息を吐きながら、先輩は封筒を俺に渡す。

中身を覗くと、そこには頼もしき福沢諭吉さん小隊が入っていた。日本の象徴にして、2期連続で最高額の紙幣の顔役を張るそのお方たちは、俺の財布に切り札として残してある樋口さんの2倍の戦闘能力を有している。10人揃えば20倍。これはもう明らかに決定的な敗北であった。

「じゃ、よろしくね」

笑顔で肩を叩かれて俺は頬を引きつらせる。

どうやら、商談成立のようだった。

悪魔はいません。でも、女神様はいるとは今は死んでしまった上の兄貴の言葉だ。

その時のにーちゃんが誰を想像していたのかは不明だが、俺にとって女神とは制服を着ているだけで学割を提供してくれる食堂のお

ばちゃんであり、パンの耳のおまけに余ったパンを提供してくれるパン屋のお姉さんである。

久しぶりに近所の学生食堂で学生割引を使用した味噌野菜チャーシュー大盛りなんぞを堪能してから、俺は作戦行動に入ることにした。

前金で10万。後払いで10万。先輩の金払いがいいのはいつものことだが、常に困窮しているアルバイトのフリーターとしてはとても助かる。

その金をどこから引っ張っているのかは追求しない。するのも面倒だ。

金が支払われている限りは、竜胆風葉はあの先輩の味方をしよう。「さて……と」

屋上から学校を見渡して、俺は考えを巡らせる。

まずは前提条件。先輩が死んでしまふまでの経緯を調査する。

1：犯人は先輩を今日の午前に殺害することを決意。
2：犯行現場は学校の高いところ全域。人間なんざ打ち所が悪ければ1階から飛び降りただけで死ぬ。一番可能性が高いのが屋上、あとは3階付近と体育館の屋根と見るべきだろう。

3：犯人は先輩を今日の夜に確実に殺害する。

4：犯人は先輩に関与する人間。あるいは関与しようとする人間。

5：犯人は学校関係者かその縁者。

6：真実はいつも一つ。

「……ま、こんなところか」

思考をまとめ終わって、俺はゆっくりと息を吸う。

いや……ホント、どうしたもんだらう。

俺としては別に先輩が殺されようがなにされようがどーでもいいし、金さえもらえればそれでいいんだが……なんというか、依頼を受けた身としてはもう少しばかり盛り上がりつてもんが欲しいと思う。

「むぐー！ うーっ！ ふがーっ！」

ガムテープとロープで拘束した『犯人』を横目で見ながら、俺は溜息を吐く。

いや……その、調査のために屋上に来たら、いるんだもん。殺意丸出しでござっついナイフを見つめている女子高生が。

短く切ったショートカットに黒い瞳。愛嬌のある顔立ちをしているのだが、ものすごい形相で俺のことを睨みつけている顔は般若のようにしか見えない。全然関係ないがボディバランスは神が作りたもうた奇跡レベル。団子虫のようにもがく度に、人類発祥より現世まで男性を惹きつけて離さない胸の至宝が『たぶん』のような在り得ない擬音を発しそうな勢いで揺れる。その様はまるで理性裁断機並の男ならばザクンザクンと両断されていることでしょう。

まあ、その点俺はほらあれ女の子とか嫌いだからね。しかし、神の至宝に抗うには大変な労力を必要とする。実に危なかった。

と、益体も無いことを考えていると、女の子は疲れたのか荒い息を吐きながら暴れるのをやめて俺を睨みつけていた。

俺は再度溜息を吐いて、この面倒な状況を打破するために口元を緩める。

「えっと、どこの誰かは知らないが落ち着いて聞いて欲しい。俺が屋上に来た。君はナイフを見つめて笑っていた。俺は危機感を覚えた。俺には武道の心得がある。武道つつうより殺人術に近い。それで俺は君を拘束した。拘束を解いて欲しければ大声は出すな。出したらその瞬間に喉を潰す。分かったらまばたきを一回、分からなかったら二回だ」

「……………」
拘束された彼女は、まばたきを一回した。

それを見て俺はまず口に貼り付けたガムテープを剥がす。もちろん、大声を出されることを考慮してすぐにガムテープを貼り付けられるように準備はしておく。

だが、その必要はなかった。

「で、不法侵入者さん。アンタ何者？ 女子高生を縛って楽しむ人

？」

「不法侵入つてのは失礼だな。この制服が見えないのか？」

「じゃあ、所属はどこ？ クラスと番号と名前と趣味と携帯電話の番号と住所を言ってみなさい」

「……………いや、なんか要求多くねーか？」

「私の名前は荒井翔子あらいしょうこ。この学校じゃ生徒会長をやっているわ。もちろん成績優秀の超天才で人望にも厚い。その証拠に、書記からは『カイチヨー、邪魔なんでアイスとか買ってきてもらえませんかね？』とか言われ親しまれているほどよ」

「……………」

あからさまな傀儡政権つてやつを初めて見た気がした。

そーいえば先輩が少し前に言つてたような気がするなあ。今年の生徒会長は人気があつて馬鹿でとても可愛くていぢめがいがあるつて。

いや、まあ可愛いケドね。元気のいい子犬みたいで。

俺はたつぷりと溜息を吐きながら、翔子と名乗った彼女の拘束を手早く解く。元々がつちりと結んでいたわけではないロープはあっさりと解けたが、こんなことならもつとしっかり結んでおけば良かったと思つ男心が憎らしい。

拘束を解かれて、彼女はゆっくりと身を起こして口を開いた。

「あれ、解いちゃうの？ これからエロゲーのような展開になると思つて、舌を噛んで自害する準備までしてたのに」

「さりげなくおつかねえな、アンタは！」

「んー……………しかし、スズメの涙ほどの愛情を注いでくれるのなら、君の肉奴隷になつても致し方ないと思う今日この頃。私つて女の子みたいな可愛い男の子大好きだし」

「……………」

やべえ。今のはかなり来た。

この馬鹿、人の傷を的確にえぐつてくれやがる。

女は嫌いだ、さすがに女に殺意を覚えたのは久しぶりだ。この

場に刃物があつたら思い切り振るってしまう程度には、今の俺は煮えたぎっている。

頭の中が一瞬沸騰して　それでも、次の瞬間には冷却された。それは、思いつきというよりひらめきに近かった。

「なあ、翔子さん」

「ん、なに？　私としては生徒会長って呼んでほしいんだけどな」

「アンタ　どうやって俺をこの学校の生徒じゃないって認識した？」

それは、単純な疑問。

制服を着て、学校内を当然のように歩いている。それは、一種の偽装だ。

だが、彼女はそれをあっさりで見破った。こちらはおくびにも出していないが、確かに見破られたのは事実だ。

俺のひらめきを裏付けるように、生徒会長はあっさりと言いつつた。

「や、生徒会長だからこの学校の全生徒と教員の名前と顔くらいは覚えてるし」

予想通りの返答に、俺は思い切り口元を歪めていた。

なんとなく予想はしていた。この生徒会長が先輩を殺す犯人なのは間違いない。あの殺意と殺気は間違はなく本物だった。

だが……ただの馬鹿では、先輩を殺すことはできない。

先輩は151回死んでいる。151回殺されている。どんな場所に踏み込んだら危ないか、どんな振る舞いが危ないか、それを熟知している。

経験が、先輩の生存力を高めている。それは……生物としてはこの上ない強みだ。

それでも先輩は死んだ。151回目の死を迎えた。

その理由が　目の前にいる、馬鹿っぽい生徒会長だった。

「それを聞くってコトは、やっぱり君は不法侵入者ってことでいいのかな？」

「そうだな。会長が見破った通り……俺は、この場所じゃ不釣合いな異邦人さ」

にやりと口元を緩めて、俺は会長を見つめる。

会長は微笑みながら俺を見つめ返した。

うーん……やりにくい。

「今の俺は仕事でここにいる。その仕事の内容は明かすことはできないが、会長のようにナイフを見つめて悦に入ってる会長みたいな危険人物を見逃すわけにもいかなくてな」

「悦に入るっていうより、イメージトレーニングかな」

「イメージトレーニング？」

「うん。私、これから人を殺さなきゃいけないから」

あっさり。

なんでもないことのように。

生徒会長を名乗った彼女は。

当たり前のように、人殺を宣言した。

「……人を殺すってのは、穏やかじゃないな」

「だろうね。私も馬鹿だとは思うんだケドね……。どーにも、許せなくてさ」

会長は困ったように笑って、頬を掻きながら言った。

「さすがに……後輩が死んじゃうってのはね、許せなかった」

等々力歌子は金払いがいい。

金払いがいいってことは、金を支給している親が金持ちだったということ。

ただ……その金が、真つ当な手段で稼いだ金とは限らない。

「別に、なにが悪いってわけじゃない。私が殺そうとしている子には一切罪はないし、死んだ子にも罪は無い。罪があるとしたら、借金の責任を娘にまで押し付けた借金取りくらいなものだろうね。あと、お金を無計画に借りたあの子の両親、かな」

「……………」
「いい子だったんだけどね。ある日を境に別人みたいになっちゃって。半狂乱になった末に学校にも来なくなつて、数日前の夜に死体で発見されて、私のところに連絡が来たのが、昨日の話」

「他殺だったのか？」

「自殺とか他殺とか……これから復讐しようつて人間に関係あるかな？　これから……八つ当たりしようつていう人間に、関係あると思つ？」

「……………」

全く持つてその通り。問題だったのはその後輩の子にトドメを刺したのではなく、その後輩の子が死んでしまうような環境に追い込んだ全てなのだから。

自己満足の自分勝手。馬鹿のくせに妙に聡い生徒会長は、恐らくその行為の果てになにもないことを知りながらも、自分の心を止めたくないのだろう。

許せないから、思い知らせる。

大切な人を失う悲しみと怒りを、思い知らせてやる。

まずは手始めに、後輩を追い込んだ奴の子供から殺してやるつ。

喪失と共に　思い知れ。

「……………　なんで、それを俺に話した？」

「君が等々力歌子ちゃんの知り合いだからだね。よく校内で話してるのを見てたよ」

前々から知られていたことは、意外ではなかった。

先輩とは密室だけじゃなくて校内で話しこんだこともあるし、生徒会長が先輩に注意を払っていれば　俺に存在に気づくのも道理だろう。

この学校の生徒じゃないことも、見て見ぬふりをしていたわけだ。後輩とやらのことも……見て見ぬふりをすりゃいいのに。

見て見ぬふりをして、俺のことも無視してりゃ、俺がこんなことを言つ必要もなかったつうのに。

「なんて言えばいいのか分からないが、思い詰め過ぎじゃねーか？ どう考えても殺すのはやりすぎだろ。殺意なんざ、ラーメン大盛り食って、腐るほど泣いて、それから布団に入ってぐっすり眠って翌日になればすっきりさっぱり忘れてると思うぜ」

「いや、いくらなんでもそれは単純過ぎない？ キミだって家族とか友達とか、親しい人が殺されればこんな感じになると思うよ」

「……………」

友達をよく分からないが、家族とはしばらく会ってもない。

おふくろは早くに亡くなって、親父はどうしようもないロクデナシだった。

上の兄ちゃんも俺が小さい頃に死んで、下の兄ちゃんと姉ちゃんたちは、ロクデナシの親父と共に、かなりの苦勞を強いられていた。俺に苦勞させないように、兄姉全員が協力していたような気がする。

そんな兄ちゃんや姉ちゃんが不幸な目に遭ったり、殺されたりしたらどうするか？

ああ……なるほど。それなら分からないでもないか。

「そーだな。ま、共感はできなくもないが……今の俺は歌子先輩に顎で使われている身でね、残念ながら会長の味方はできないんだ。本当に残念だな」

「うん、なんとなくそうだと思った。君ってなんとなくヒモ（付き合っている女性に依存している男性のこと）みたいな気配があるし」

「……………」
バイトはしてるっちゅーねん。末っ子だからって甘くみるなよコンチクショウ。

ゆっくりと息を吐いて、俺は空を見上げる。

やれやれ……なんでこんな面倒なコトになっちゃうのかね。血筋か？

青い空から返答が返ってくるわけもないので、俺は会長を見つめる。

「本気なんだな？」

「うん、本気だね。……私は、等々力歌子を殺す」

「……分かった」

それだけ聞ければ十分すぎる。

俺はきびすを返して歩き出す。背中にも会長の視線は感じたが、彼女とは止めようとしなかった。

ただ、なにもかもが終わった瞳で、俺を見つめているだけだった。

そんな会話を交わしてから数時間。日は既に落ちて外は真っ暗になっっている。

外を見つめて溜息を吐く。やることは決まっているのに踏ん切りがつかないのは……多分、情に流されたせいだろう。

悪魔の密室に俺はいる。部屋の様子はいつも通りではなく、キリカがいつも寝転がっているベッドには先輩が眠っている。太もものあたりが扇情的だったが、今の俺にはその脚線美に見入っている余裕はない。

逆に、キリカは目を細めてソファに座っていた。その視線は俺に向けられている。

いつものお気楽さをどこかに捨てて、キリカは不意に口を開いた。

「ねえ、なぎちゃん。人を殺す人を君はどう思う？」

「別にどうも。ただ……『よくやるよ』とは思うかな」

「なぎちゃんらしい意見で実に結構。では、質問を変えよう。……」

歌子ちゃんを気絶させてベッドに寝かせて、君はこれから野獣にでも変身するつもりかな？」

「いや、邪魔になりそうだから」

「……歌子ちゃんが聞いたなら激怒しそうな言葉だね、それは」

キリカは、苦笑しながら呆れていた。

呆れながら……それでも俺から目を離すことはなかった。

「ねえ、なぎちゃん」

「あんだよ？ さつきからしつこいぞ」

「なぎちゃんはさ……結局どっちの味方をするの？」

「どっちもへつたくれもない。俺は金をもらった。金をもらったからには仕事をする。それだけのことだろうよ」

当たり前のことを当たり前のように言うと、キリカは不意に表情を曇らせた。

「ちえつ。あの会長ちゃんの欲望は、すごく美味しそうなのに」

「会長の欲望って……先輩を殺すことだろう？」

「違うよ。なぎちゃんも言っていた通り、殺意なんて一時的なものだよ。持続するにはものすごい労力が必要。……でも、欲望は違う」

「……ってことは、会長には他に願いや欲があるってことか」

「そーゆーこと。なぎちゃんと同じようにね」

キリカはそう言っていていつも通り、にやりと悪魔的に笑う。

とても嬉しそうで楽しそうで見ているだけで羨ましくなるような、そんな笑顔。

少なくとも……俺はキリカ以上に綺麗に笑う存在を知らない。

「キリカ」

「ん、な〜に？」

「今まで言い忘れてたけど、お前って可愛いよな」

「……………へ？」

「じゃ、行ってくる」

啞然としたキリカの表情は見ものだったが、俺は口元を緩めて歩き出す。

悪魔に魅入られたのならそれでもいい。たまにはそんな夜も、悪くない。

どちらにしる、俺の立ち位置は決まっている。今更迷うこともないだろう。

「さてと……それじゃあ、いつちよやりますか。にーちゃん」

形見の品を手に、俺は一步を踏み出す。

月の光に血と肉と骨を照らされながら、俺は土壇場へと向かうこ

とにした。

彼は私を奇妙な部屋に案内した。

そこは体育倉庫の一番奥。生徒が誰も近寄らないような場所にあった。

一見様はお断り。俺がいなきゃ見えもしないと言いながら、彼は扉を開けた。

部屋の中には

ざぐん、と音が響いて私は終わった。

「ちよ
」

振り向く。彼は園芸用の鎌を振りかぶるところだった。

ざぐん、と音が響いて私は終わった。

「なにが
」

死に様が蘇る。私は首を切られて死ぬ。死んでしまう。

振り向いている暇は無い。意識が戻ると同時に私はしゃがむ。返す刀でざぐん。

しゃがんでいたら間に合わない。振り向いても間に合わない。

せめてもの抵抗で、私はバックステップの要領で彼に思い切り衝突する。

「ぐっ……」

やった、助かった。慌てて手を踏みつけ鎌を奪って遠くに投げる。とりあえず逃げなきゃ。彼は歌子さんを殺されると知って私を殺そうとしている。いや、もう何回か殺されたのか？ 記憶は曖昧で

ことはしなかった。

ウチの学校の指定制服である学ランに、どこで入手したのかよく分からない真っ黒な外套。そして……手に握っているのは、鈍く光を放つ園芸用に使われる片手で扱う鎌。

顔はまるで天使のようで、それでもその笑顔はまるで悪魔のようだった。

「ルールを教えてやるよ、生徒会長」

「え？」

「あれは悪魔の密室。悪魔が住まう部屋。アレを見た者は学校内じや死ねなくなる」

学校内じゃ、死ねなくなる。

ってことは……学校の外にいる人間は、死ぬ？

学校外にいる私は、死ぬってこと？

「はは……死んじゃうのか」

これから殺されてしまうというのに、安堵感だけがあった。

死ぬのはいい。ものすごく痛いし辛いし自分が消えるのは嫌だけど、アレが一度だけなら、なんとか耐えられる。

耐えられないのは……殺され続けること。

蘇生して死んでまた蘇生で死んで、それを繰り返すこと。

記憶は消えているのに、死因だけは明確に思い出せるのがなおきつい。

私は今、10回死んだ。それでもう 死んでしまいたいと思っている。

「それじゃあ、聡いアンタに一度だけ聞いてやる。……なあ、会長。アンタには殺す覚悟はあるみたいだが、『殺される覚悟』ってのはあるかい？」

「……………」

「共感や同情で殺すことはできるが……殺されるのは殺すよりきついだろ？」

彼の言う通りだった。

私には、殺す覚悟はあっても殺される覚悟なんてなかった。

私が罰して当然。これは自分勝手の身勝手で、だから私が殺して当然だと……当たり前のように思い続けていた。

ああ……本当に、なんてことだろう。私は私が殺される可能性を考えていなかった。

あの苦痛を経験してしまった私は……もう、後輩の敵を討てなくなってしまった。

死に続けるのは嫌だ。痛いのは嫌だ。苦しいのも辛いのも嫌だ。死にたくない。

「……私を、殺すの？」

「アンタが歌子先輩を殺そうと思わなきゃ、殺しやしねえよ」

「そう言いながら、背中からざぐんってやらない？」

「やらない。……大体よう。俺は会長みたいな女を殺すのは心底嫌なんだ。殺したくないんだ。殺すんだったら自分が死んだ方がましだ。だから……もう、やめようぜ？」

そう言っつて、彼は私を見つめる。

今にも泣きそうな表情で、私のことをじっと見つめていた。

……やれやれ、だ。

知らない間に私はとんでもないことになっていたらしい。

後輩が死んで、頭の中でなにかがぶつつんして、それから歌子さんを殺そうと決意して、彼に会って、殺されて、殺され続けて……全く、私らしくもない。

スーパー生徒会長、荒井翔子は可愛い男の子は泣かせない生徒会長だというのに。

ああ……ごめんね。ゆっちゃん。

私は、ゆっちゃんの仇を討てませんでした。

「うん、分かった。よく思い知った。私が浅はかだったよ」

「そう言いながら、先輩の全間接をおもちゃ屋の人形のように曲げ

るつもりじゃねーだろうな？」

「いや、殺すんだっつたらもっとスマートに殺すから」

っていうか、そんな真似はどこのスーパー地球人でも出来ないと思う。

彼の中の私の評価がすごく気になったけど、それよりもやらなくてはいけないことがあったので、私は最後の力を振り絞って口を開いた。

「あのさ……疲れてるところ悪いんだけど、一つお願いしていいかな？」

「ん？」

「止血……よろしく」

わりと洒落にならない出血と痛みに、私の意識はそろそろ限界だった。

と、次の瞬間には意識が真っ白に染まる。

気絶する前に……もう一度だけ、ゆっちゃんに謝って、私は意識を失った。

それは、ルールの側面を突いた裏技でもなんでもない、当たり前のこと。

悪魔の密室では死亡が確定した日＝誰かに殺意を抱かれた日と定義されている。

殺意を抱かれてから殺害を実行されるまでの時間が2秒程度なら、殺された次の瞬間に蘇生して、2秒後にまた殺される。

そう……突発的、衝動的に殺された場合は、『殺され続ける』ことになるのだ。

死んで生き返ってまた死んで……殺され続けて死に続けて、足掻いてもがいて学校の外に逃げ出して、ようやく殺される。

キリカが『自殺』と表現した理由がまさにそれだ。

「殺され続けても血路は切り開ける。1秒でも時間があれば、相手

に反撃するくらいはできるでしょ。なのに死ぬのを嫌がって生存の道を諦めるのは……それはまごう事なき自殺だとは思わない？」

「思わない。一切合財絶対に思わない。大体お前、相手が拳銃とか卓越した殺人術とか持ってたらどーするんですか？ 責任とか取れるんですかこの野郎。」

「普通高校に通う学生さんがそんなものを所有しているのは嫌だなあ……」

「まあ、俺は別に学生じゃねーからな。通いたいのは否定しねーけども。」

「夢うつつに俺は思う。意識は半分夢の中に沈んでいる。」

時刻は午後の23時。ループはしていない。生徒会長と争った『翌日』の23時だ。

生徒会長の治療をして、先輩が出て行くのを確認してから、俺はいつもキリカが眠っているベッドで眠りについた。

眠れないのは分かっていたけど眠らないと死んでしまうから、目を閉じないとおかしくなりそうだったからなんとか無理矢理眠りについた。

眠りが浅い。一日中寝ても寝足りない。不意に目が覚めてキリカの顔を見て、なんとなく安心して眠りにつく。……そんなことを1日中繰り返していた。

無駄な1日だった。20万程度じゃ割に合わない。そんな1日を過ごした。

ぼんやりと天井を眺めていると、キリカが俺の顔を覗き込んできた。

「なぎちゃん、起きてる？」

「……起きてるよ。眠いけどな」

「ボク、そろそろ出かけるね。今日は新月だから」

「あー……そっか」

新月の日にだけ、キリカは自分の意思で悪魔の密室を出ることができる。

とはいえ、頭に角は生えていないし、力の方も並の人間と大差ない。ただ、キリカ曰く力があるうがなかるうが、この部屋以外の風景を見ないと心が死んでしまうとのこと。

悪魔を殺す一番簡単な手段は、退屈以外の何物でもないそうだ。

「ちよつと美味しいもの食べてくるけど、お土産はなにがいい？」
「無事故」

「……あの、なぎちゃん？ まぢで大丈夫？」

「んー……あんまり大丈夫じゃないけど気にするな。殺意なんて一時的なもんだからな、1日寝て起きれば治るはずだ。悪魔は人間の心配なんてせずに享楽を貪ってきなさい」

「そこまで言うなら行ってくるけど……ボクがいない間に死んじゃ駄目だよ？」

「あいよ」

寝転がりながら適当に返事をして、俺は顔も上げずに手を振った。キリカは少しだけ心配そうな表情をしていたが、俺が眠ったふりをすると思を決したように一ヶ月ぶりに部屋から外に出て行った。

……ホント、悪魔のくせに心配性な奴だ。

枕に顔を埋めていると、ゆっくりとではあるが浅い眠りに落ちていく。浅い眠りを1日繰り返して、自分がやったことを薄めていかなければ耐えられない。

人を殺した事実には、俺自身が耐え切れない。

人は人を殺さない。殺すこと以上に大切なことがたくさんあるから。

人は人を殺す。大切なこと以上にどうしようもないことがたくさんあるから。

『凧葉、みんなを頼むよ。……僕は多分、生きては戻れないから』

そう言い残した上の兄ちゃんは、本当に生きて戻らなかった。

大切なことをたくさん残したまま……死んでしまった。

だから死ぬのも殺すのも嫌だ。傷つけ合うのも嫌だ。関わるのは悪魔だけでいい。人とは関わりたくない。人は死ぬ。死ねば傷つく。

先に死なれて傷つくのが嫌だ。死ぬのはいいけど死なれるのは嫌だ。嫌だ。嫌だ。

殺すのは……もっと、嫌なのに。

「凧葉くん」

耳に届いた聞き慣れた言葉に反応して、俺は目を開ける。

目を開けたと同時に寝ている間に考えていたことは忘れてしまったのだが、なにか悪い夢を見ていたことだけは覚えていた。

最初に飛び込んできた風景は、珍しく心配そうな表情を浮かべている先輩だった。

「……なにしてんだよ、歌子先輩」

「寝顔鑑賞……と言いたいところだけどね、今日はプチ家出よ」

「そつすか」

「そつすよ」

先輩は嬉しそうに笑いながら、寝転がっている俺に向かって顔を近づけてきた。

その距離、5センチメートル。少し動けばキスでもできそうな距離。
離。

顔を近づけたまま、先輩は口を開く。

「あら、凧葉くん。なにも言わないのかしら？ それとも、キスとかしたい？」

「……キスはしたくない。なにも言いたくない。先輩に用事もない」
「強情ねえ。顔に似合わず。……それとも、私が男の方が良かった？」

「男は女の百億倍嫌いだ」

適当なことを言いながら、俺は顔を逸らす。

先輩は苦笑しながら、俺を押し倒したような姿勢のまま、ぼつりと言った。

「今回のこと、ありがとう。私が生きていられるのは凧葉くんのお

かげ」

「礼なんて要らない。金もらったからなんとかしたただけだし」

「それでも言わせて。貴方は……私の思った通り、生徒会長を殺さないで今回のことを綺麗にきっちり終わらせてくれた。あの子が犯人じゃなかったら、絶望と憎悪と無力感の中で髪の毛からつま先まで少しずつ少しずつ摩り下ろしながら殺してたところよ」

「……………」

女っておつかねえといつも通りに思ったが、俺はなにとも言えなかった。

綺麗に終わらせたわけじゃない。殺さなかったわけでもない。

結果的にそうなっただけで、俺はただ生徒会長よりも金を選んだだけのことだ。

それだけのことだ。

「納得いかないって顔ね？」

「納得なんて一生かかってもできねえよ」

「お金を選んだ自分は醜い人間だと思う？」

「いいや、普通だろ。金が欲しいわけじゃないけど、金がないと生きていけない」

「会長を選べなかった自分は浅ましいと思う？」

「別に。同情も共感もできるけど、俺はあそこまで潔白には生きられない」

「それじゃあ……貴方はどんなことに罪悪を感じているのかしら？」

「全部」

それだけ答えて、俺は息を吐く。

結局のところ……そういったことを全部踏まえて、俺は俺が許せないだけ。

諦観に達している自分が腹立たしいだけ。眠りが浅いのも、単純に自分が許せないだけ。

そんなことは、とっくの昔に分かり切ってる。……分かってるのに判りたくない、子供のように駄々をこねている。

先輩は、そんな俺の心中を見透かすように、薄く伶俐に笑った。
途端に……空気が、変わった。

「ねえ、凧葉くん。私に なにかして欲しいことはない？」

肌がビリビリする。言葉一つ一つがなによりも重くなる。

「まったく……なんでこう、この人はいつもこうなんだろう？」

「そうね、頑張ってくれたことだし、今なら大サービスの赤字大売
出してことで、凧葉くんが本当に望む世界くらいは作ってあげて
もいいわ。5年ほど待ってもらうことになるかもしれないけど、5
年後にはそれこそ理想郷って感じの世界を作ってあげましょう」

「いや、誰もそんなこと頼まねーし」

「む、それじゃあストレートに私の体がお望み？」

「……………」

どうしてこう、この人はこういうストリートなことしか言えない
んだろうか？

権力やお金があるのは分かるが、もう151回も死んでるのにラ
スポスつぽいことを仄めかすのは正直どうかと思う。

これ以上相手にするのも正直疲れたので、手っ取り早く一石二鳥
にすることにした。

「じゃあ、先輩。一つだけいいか？」

「なに？ やっぱりちゅーまでとかいひゃうっ!？」

問答無用で先輩を抱き締める。文句も言わずに胸に押し付けて、
俺は目を閉じる。

ああ……うん。まあ、なんとか眠れないこともないか。

「ちょ、ちよつと凧葉くんっ!？」 これは強引過ぎるっていつか急
展開っていつか下手すると犯罪になりかねない勢いでっていつかえ
ええええええっ!？」

「……………先輩」

「な、なにかしら？」

「実は俺、抱き枕派なんだ」

「……………へ？」

「じゃ、お休みなさい」

あらゆる全部は非可逆で、似たようなモノには戻れても、決して元には戻れない。

結果的には死んでいなかったとしても、俺が生徒会長を殺した事実は変わらない。変えようとも思わない。生徒会長を殺す以前に、俺は既に殺人者なのだから。

たくさん後悔して、たくさん壊れた。限界などつくの昔に通り越している。

それでも……………なにかをしないまま、壊れて死ぬことには耐え切れない。

誰かのぬくもりを感じながら、まどろみの中に落ちていく。

「……………ごめんなさい」

誰かに謝りながら、俺はようやくやく眠りについた。

人を殺したことを一時でも忘れるために、まどろみに沈んでいった。

非常事態が発生しました。

えっとね、確かに調子こいてたのは事実よ？ 死ぬことが分かって、時間がないことに焦って、結局よく考えれば自分一人でも楽勝で解決できたはずなのに、慌てすぎて彼を頼って、結局傷つけてしまったのは事実なわけだし。

やったことの責任は、自分で取らなきゃいけない けど。

「……………えっと」

顔近い。

抜け出すのは不可能。

寝息が耳元でくすぐったい。

男の子のおいがする。

「ね、寝れるか……」

突っ込んでみた。

もちろん、言うまでもなく凧葉くんが起きる気配はなかった。

「……うーん、これは果たしてどうしたものか。セクハラとは違うような気がするし」

溺れる者は藁をも以下略、みたいなもんだらう。

竜胆凧葉。性格は臆病。重度のシスコン。顔が可愛いのが最高の美点にして欠点。口調はぶっきらぼう。お金はとても大切にす。白いご飯だけの食事をとても美味しそうに食べる。すごく可愛い。豪華ディナーはラーメン。お寿司は宇宙人が食べるもの。現代人なのに本当の飢えを知っている。どんな生活を送ってきたのかすごく気になる。誕生日と血液型は不明。高校には通っていない。甘えたくとも甘えない。一人で傷ついて一人で復帰。存在として最強。存在として最弱。強すぎて脆い。弱すぎて柔軟。特技は殺人。

151回ほど死んでいる私を、123回助けた彼。どうしようもないほどお人好しで、どうしようもないほど甘ったれ。

こんな悪人を助けるなんて……本当に、人間としてどうかしている。

「だから、お礼は絶対にするのよ。123回の死に報いる、そんなお礼をね」

私がいいか世界がいいか。いずれにしる、面白いことになる。

面白くしてやるう。私がこの手で、どんなものを犠牲にしても。

「……ごめんなさい」

不意に、そんな声が聞こえる。

その声で私は少しだけ正気を取り戻す。人間の側に戻ってくる。

悪魔に魅入られて、人間すらも辞めかけて、それでもまだ人間が人間でいられるのは、恐らく彼がいたからだらう。

人殺しは悪いこと。そんな当たり前のコトを誰よりも知っている彼がいたからこそ、私は……まだ、この場所にいられる。

そのことに感謝はしないけど……容赦くらいはしておこうか。

「さてと、それじゃあ今日のところはここまでにしておきましょうか」

中卒の彼と違って、私は明日も学校がある。早く寝て明日に備えなければならぬ。

が……果たして私は無事に明日の朝日を拝めるのだろうか？

「いや、寝れないわよこんなの。生殺しっていうか、殺しすぎっていうか」

溜息を吐きながら、私はゆっくりと目を閉じる。

まあ、たまにはこんな夜があってもいいだろう。

お休みなさい。……いい夢を。

「って、寝れるか」

大切なコトなのでもう一度突っ込んで、私は無理矢理まぶたを閉じた。

ある学校には一つの小部屋がある。

その小部屋は秘密の部屋で、ルールを守れば誰もが幸せに暮らせる部屋。

部屋の主は真の名を冠する悪魔。嘲笑いながら彼は今日も誰かを待つ。

部屋に居座るのは一人の少年。無駄な技術と心を持って、今日も彼は無意味を知る。

部屋に訪れるのは一人の少女。無駄な暴力と権力を持ち、今日も明日も死に続ける。

部屋に招かれるのは一人の少女。無駄な痛みと現実を抱え、今日も終わり続ける。

主と住人と部屋の物語。

その物語の末路は……未だ、騙られない。

3 騙り：バッドエンドへようこそ (後書き)

と、いうわけで次回に続く。

次回のスピンアウト人物は生徒会長さんになります。

彼女の弟の友達の話。

おおむねコメディ予定ですが、作者の気分によっては変更になる場合もあります。お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2552e/>

境界向こうのモノ騙り

2010年10月10日16時39分発行